
Meets again ~もう一度君と~

朧月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Meets a girl~もう一度君と~

【ΖΖード】

Z3551D

【作者名】

朧月

【あらすじ】

ある日、訪れた幸福な転機。しかしそれは、同時に危険な罠との戦いの始まりだった。幸せから一転……引き裂かれたコナンと蘭。真実を知られた蘭は、コナンを救うため命を懸けた。怪我を負ったコナンは必死で蘭を助け出すべく動く。哀や平次の助けを借りて、組織と闘うコナンだが……！　「蘭、今度こそおめーを救ってやりてーんだ。だから、もう一度だけ、やり直させて……くれねーか？」懇願する彼の言葉が示す意味は！　待ち受けるラストは果たして、幸せか悲しみか。どうぞ、お楽しみ下さい。

01・訪れた転機

全てが順調にいくと思っていた。めでたい事続きの後は、苦しい出来事も起つた事を、忘れていた。

01・訪れた転機

「本當か!? 本當に、出来たんだな!」

「ええ、これで後は組織を何とかするだけよ」

哀が広げた手に、その小さな力プセルがあった。嬉々として手を伸ばしたコナンだが、しかし彼女のもう片方の手に叩かれた。

「言つたでしょ？ 組織を何とかしてからつて。それまでは危なっ

かしくて、工藤新一に戻つてもうわけにはいかないわ」

「……へイへイ、判つたよ。何とかすりやーいいんだろ?」

むくれながらも、手元にあつたコーラを一気に飲み干し、むせた。

「バカね、テンパリすぎよ。とりあえずそれまで薬は預かるから

「わーつたよ、大切に保管しとけよ?」

「ええ。勿論」

まだ咳が治まらずに、涙田で詰まつた声を出したコナンを、哀はクールに頷きあしらつた。

「」の解毒剤の完成が、彼を無駄に舞い上がらせる結果となつてしまつたのだろうか。この後起じる惨劇は、音も立てずに彼らの元へ忍び寄つていた。

ルンルン気分で、博士の家からの帰り道を歩いた。探偵事務所まであと少しの所で、前から来る蘭に気づいて、コナンは笑顔で手を振つた。

「あ、コナン君！」

「蘭姉ちゃん、今帰り？」

「そうよ、コナン君は、そっちの方向だと博士の家言つてたのかな？　今日ね、お父さん居なくてお金預かってるの……」そのままお食事でも出かけちゃおつか？」

「うん、賛成！」

帝丹高の制服を着た帰り姿の蘭の提案に、コナンは大喜びで乗つた。

「じゃあ、ちょっと着替えるまで待つて！　美味しいお店連れてつてあげるから」
「うん！」

今朝の占いでは、コナンの運勢は一位だ。その通りの一日に、彼はとても上機嫌だった。

蘭が着替えて出てきて、一人で食事をしにいくその最中も、その機嫌は落ちることがない。

「何かいい事あったの？」コナン君

「え、うん。ちょっとね！」

「うふふつ、コナン君が上機嫌だと、私も嬉しいわ！」

繋いだ手を、縦に振りながら、レストランまで束の間の散歩も楽しんだ。

小さい身体とももうすぐお別れ。そう考えると、テーブルに運ばれてきたお子様ランチすら、コナンには少し別れが惜しみがたいものに感じた。

ただ、工藤新一に戻った後、これから逆に彼女をエスコートする事になるかと考えると、自然と気持ちは弾んだ。

帰る頃、外はすっかり口も落ち、闇に包まれていた。歩くアスファルトの凹凸面もよく見えない程くらいその道は、街灯も切れかけて、月明かりのみが頼りのような夜道だった。

暗い道を女子供が歩くものではない、という教訓なんて、コナンの感覚ではあってないようなものだ。蘭は一流の空手家、自身はまた彼女を守れるだけの自信はある。

しかし、全く予期せぬ出来事に上手く対応するには、相手が悪すぎたのだ。

01・訪れた転機（後書き）

初めての方は初めまして、既にお知り合いでの方はこんにちは！　朧月と申します。v

お読みくださつてありがとうございます。v

そして、年も変わり、明けましておめでとう御座います。v
ええ。つぐづぐ、好きですねえ、私……こうこうネタ。
組織がらみのシリアスラブ人間です。

暫く水面下でして来たものが、頭の中ではつきりした形をなしてきましたので、新年で気持ちのリフレッシュの意味も兼ねて、投稿いたします。

ストックもあるけれど、主要連載系の一の次に、リハビリ的に書く形になると思うので、基本的に遅い更新となるかと思います。（得意なネタ書くとテンション上がつて他の執筆も進むんだもん。申し訳御座いませんv）ですが、どうかお付き合いいただければ幸せです。v

まだ、出すキャラは全て決まったわけではありませんが、とりあえずコナンと蘭は主キャラとして、哀、平次、そしてFBIや警察諸君、組織などはたくさん登場させる機会を作りたいなど。
見ていく中で、もし気に入つて頂いた際や、感想が浮かんで下さった際には、「メント等残して頂くと、執筆の励みになるかと思います（*^-^*）

では、次話以降でもまたよろしくお願ひ致します！！

さて、NEXTの先には、緊迫ムード突入させたいと思います

02・暗闇の攻防

暗い路地を壠づたに曲がった所で、それは起つた。本来気配に鋭いコナンも、勿論蘭も気づいてはいなかつた。自分の後ろに近づく黒い影に。

「やつと見つけたぜ……工藤新一」

その声で、気づいて振り向いたのと同時に、コナンの足に激痛が走る。

「コナン君ー？」

蘭の叫びがその場に響いた。撃たれた銃創が動脈を傷つけたのだろう、血がドクッと大量に吹き出る。耐え切れず、地面に倒れこんだコナンは、まだ上手く頭が回転しきれていない。

そんなコナンを庇うように、蘭は男との間に立つた。震えながらも、ぎつと男を睨む。男は狂つたように笑う。

「貴様が生きているとは思わなかつた！ 我々が血眼になつて探していたのはシェリーだ。それが、まさかこんな収穫を生むとはな。盗聴させてもらつてた事にも気づいてなかつたらう？」

「…………やつ、ぐ。」

蘭だけが、男の言葉の意味がまるで判らず、困惑しきつた顔で男とコナンを見比べた。

「な、何なのよー。突然こんな子供に発砲して、意味の判らない事言つてー！」

「貴様も調べたさ。毛利蘭……」工藤新一のガールフレンド

「つ！？」

蘭が息を呑む。「」の暗い道の静寂に溶け込むような男の低い声が、どれだけ恐ろしいものかと言ひ事が、充分彼女にも伝わった。

「ら、蘭ねえちや……だ、ダメだ！ 今すぐ逃げて」

「何言つてるの！？ コナン君を置いて逃げたりなんか……こんな奴、私の空手でなんとかするから！」

「いいから！ 逃げて……つ！」

組織が既に蘭の事まで調べているとしたら、彼女も危ない、とコナンはすぐに直感した。けれど、コナンの声を素直に聞くような蘭ではない。守りたいと願つ彼女の意思は、恐怖に負けるようなものではない。

「ククク。そんなに愛しいか、そいつが。どんな体になつたとしても」

「どういつ意味よ！？」

「おや？ 知つていてると思つたがとぼけるか？ そのガキが工藤新一だからさ！」

聞いた蘭の目が、動搖して大きく見開いた。口を半開きにしたまま、驚きを隠せない顔で後ろのコナンを振り向く。コナンは、頷きも否定もしなかつた。

「コナンの反応をどう受け取つたか、暫く無言のままコナンを見つめていた蘭は、男の方を向き直る。

「……違うわ、この子はコナン君。ただ的好奇心旺盛な小学生よ！ 新一は確かに私の幼馴染だけど、もし新一が居たらあんたなんか

！」

「ら、蘭ねえちゃん……」

「ふつ、今更本氣で言つていいかどうかなんてどうでもいい。そのガキを渡してくれたら、お前を見逃してやらない事もないんだぜ？」

蘭はあからさまに不快な顔をし、コナンは逆に覚悟を決めた表情を浮かべた。

くいつと小さく蘭の服をひっぱり、振り向かせて穏やかに笑った。

「蘭姉ちゃん、いいよ。大丈夫だから」

「コナン……君？」

眉を顰め、大きく見開かれた瞳がコナンをじっと見つめる。そんな蘭に、とても静かな声で彼は告げた。

「ボク、この人が誰か実は知ってるんだ。抵抗しなければ、蘭姉ちゃんもボクも、傷つけられたりしないから。だから、ボクこの人の所に行くよ」

「何言つてるの！？」

「ね、だから蘭姉ちゃん……前に続く道を開けて？ 肩貸してくれれば、立てるから」

諭すような言い方で話す様は、言葉遣いはどうあれ、既に子供の姿ではない。男の耳にも聞こえていたのだろう、にや、と口元を歪ませ笑っている。

そのまま、十秒ほど蘭は無言でコナンを見つめた。

「ダメよー。」

大声で叫び、静寂を破ったのも彼女の声だ。

「ねえ、その逆もありでしょ？ 私が行きます！だからこの子を無事に帰して。人質にでもなんでもすればいいわ！ ここの子を生かしてくれれば、私はそれで満足だから」

「フン、そんな要望が聞けるとでも？」

「ダメだよ、蘭姉ちや……む、ぐ！」

静止しようとして声をあげたコナンの口が、蘭の後ろ手に封じられる。はがそうと必死になつても、抗うだけの力など、今のコナンにはない。

「どうしてこの子を狙うの？」

「知つてはならない秘密を手に入れているからさ。安心しろ、貴様もこいつも、殺せという命令は受けていない。ボスに引き渡すまで、一緒に居させてやつてもいいんだぜ？」

言いながら歩み寄ってきた男に銃を突きつけられてしまつては、蘭もどうする事も出来なかつた。隙あらば蹴りの一つでもと思つたが、その隙すらもまるでない。

「車に……乗ればいいのね？ でも、コナン君の怪我は病院に……」「止血をしておけば死にはしないわ」

男はそういつて歪んだ笑みを浮かべた。強引に掴んだ蘭の腕を、車の中に引き込んでゆく。

そして、悔しがり下唇を咬むコナンも無理やり抱き起しつゝ、車へと突き飛ばす。蘭が慌てて受け止めたコナンは、俯きながら身体を起こした。

「コナン君……大丈夫だからね！」

「…………なの？」

コナンを抱きしめ、耳元で声をあげる蘭に、彼はぼそりと呟いた。小むすぎる声は、車のドアが乱暴に締められた音に打ち消された。発進した車に乱された体制を整えなおして、蘭は再び、彼の今言つた言葉を聞き返した。

02・暗闇の攻防（後書き）

ところがで、改めまして。

お読みくださつて有難う御座いますーっ♪

どうか、末永くお付き合いでいただけたなら幸せです♪
ええ、未熟な作者ではあります、未熟なりに頑張つてこうと思
いますので♪

たっぷりストックをためつつ、無理なくゆうへりと頑張ります！

日々精進はしてゐつもりですが……一応一作一作目標を決めて作っ
ております^_^

今回の目標は……読みやすい文章作りです。前よりも読みやすくな
った、と思っていただけたら僅かに進歩という事で^_^
変わらないなら変わらないで、温かい目で進歩するさまを見守つて
やつて^_^一話一話頑張つりますから^_

ところがで、次話以降でもできるだけ楽しい話題指して作つてい
くので、またよろしくお願ひ致します^_

聞き返されたコナンは、前の男達に聞こえない程の音量を保ちながら、今度ははつきりと応えた。

文句を言つよつて、独り言を零すよつて。

「…………逃げてくれなかつたの？」蘭姉ちゃん

「え……」

「コナンの言葉に、蘭が表情を凍らせたが、更に深く俯いたコナンは、再び付け加えた。

「いや、判つてるけど。ああなつたら絶対僕を見捨てる筈ないと思つた」

「……もしかして、怒つてるの？」

幾分低いトーンの声を耳にして、蘭は覗き込みながら尋ねた。深く座りなおしたコナンは、蘭から視線を逸らしたまま、応える。

「悔しかつただけだよ。油断して怪我しなければ、蘭姉ちゃんをこんな目にあわせなかつた。怒つてるように見えるなら、やつらに後れをとつたオレ自身に腹を立ててるだけだ」

「……”オレ自身に”か。なんだか、その口調、コナン君じゃないみたいだね」

蘭の声と、車の走る音が重なる。ほんの僅かな時間だといつのに、既にそこは米花町とは違つ景色が広がつていた。そんな流れの景色を見つめながら、前の男達に聞こえないよつて、コナンはゆつくりと蘭に尋ねた。

「何があつても、オメーの事巻き込みたくなかったんだよ。なあ、一体どこまで、判つてるんだ？ オレの事聞かされた時のあの態度は、元々それに気づいてたように見えたけど」

そう呟くと、コナンはようやく蘭の方を振り向いた。真剣な眼差しが蘭を射抜き、彼女は大きく目を見開いた。

「なんにも、わかつてないよ」

沈黙した数秒後に、彼女はか細い声で答えた。怪訝な顔で再び彼女を見上げたコナンに、蘭は再度、言った。

「私は何も知らないよ。確かに、さつき男の人と言われた時は、変に納得したけど。コナン君は、やっぱり新一なの？ あの人が言ったみたいに、私が何度も疑つたよ！」

「蘭……」

彼女の言葉が少しボリュームを上げた事で、前の男達は不審な目でちらちら後ろを振り向いた。それでも蘭は、戸惑うコナンに話をやめない。

「だつて、あなたがずっと否定してきたのよ？ あなたが、何も教えてくれなかつたんだよ？ 何なの、この黒服の人たち。何もかも、あなた自身の口から聞きたかったよ……！」

「『』、『』め……」

謝りかけたコナンだが、助手席に座る男が拳銃を構えたのを見て、咄嗟に自分の身体で蘭を隠した。

「何後ろで！」ちやかひしてんだ！ 妙な事計画だてるよつなら、今ここでもう一、二発食らわせてもいいんだぞ？」

男の怒鳴り声が車内に響いた。驚き一瞬動きが止まっていた蘭は、我に返り、自分を庇うコナンをぎゅっと抱き寄せた。

「あ、あなた達には関係ない話よー。コナン君の事、これ以上傷つけたら許さないから！」

「ほお？ 隨分気の強い娘じやねえか。さすが父親もボーキフレンドも探偵だってだけの事はあるな。……だが」

「蘭姉ちゃん！」

男が浮かべた冷笑が、異様な殺氣を纏つた事に、コナンはいち早く気づいた。コナンの叫びと同時に、引き金が動く。咄嗟に反応して身体半分動いたコナンの、左肩の胸部付近に、血が滲んだ。

「ハ、コナン君……」

蘭の瞳は、動搖するあまり小刻みに揺れた。うめき声を漏りして前のめりになつたコナンを、慌てて覗き込む。

「ここが逃げ場のない車内だつて事を忘れないでくれねえか？ あくまでも生かしておけば、急所を外して弾を撃ち込むくらいなんとも思わねえんだぜ？」

男はその歪んだ口元を崩す事なく、警告した。

苦しそうに荒い呼吸をするコナン。その様子に、蘭はポケットから出したハンカチを、傷口を押さええるコナンの手元近くに持つていく。

「しつかりして！ コナン君」

悲痛な声をあげながら、彼女は身をかがめてコナンの顔と傷を覗き見た。きつく結ばれた口と眼が、ゆっくり開く。

「だ、大丈夫だよ。蘭姉ちゃん、どこも怪我、ないよね？」

「私は平氣！ でも、コナン君タダでさえ足の怪我があるのに！」

声を張り上げる蘭に、コナンは肩間に皺を寄せながらも、不敵な笑みを作つて見せた。

「ほ、本当に。この位……、よくある怪我だし、大丈夫だよ」「コナン君……」

泣きそうになつた蘭は、ぐっとそれを堪えた。前の男が身じろぐ影を感じて、彼女はきつと前を睨む。男は嘲笑を浮かべて見せた。

「判つたら、静かにしてるんだな。自分達の、立場を弁えて、な

言つた男は拳銃を元に戻し、前の席に座りなおす。それを確認したコナンは、蘭の耳元でそつと囁いた。

「……絶対、一人とも助かる道がある筈だから、心配すんな」

そう口にしたコナンだが、そのまま力なく蘭の身体に全体重を預けた。一発も貰つた銃痕からは、止血はされても確實に血が流れ、衣服や周りをぬらしてゆく。

じわり、じわり失われる体力に、彼の呼吸も段々と、乱れてきていた。蘭がその体を、ゆっくり横たえるようにもたれさせて、彼

は何も言わずに、されるがまま従つた。その顯著に現れる彼の状態悪化を、蘭は真剣な面持ちで見つめていた。

03・車内の銃創（後書き）

こんばんは～、お久しぶりです^ ^

今回も見捨てずお読み下さつてありがとうございます^ ^

随分更新時間が空いてしまってすいません。。。とか、あれえ？（

^ ^ :

本当は今日、それは夢か現実か……の更新だけして寝るつもりだったのですよ。でも、もうひと頑張り！とレスつけてたら何か更新の遅さがだんだん申し訳なくなつてきて。

何か更新できるものないものか、と探してたら……

Meet sのストック消化しちゃいました m(—_—;) m ゴメン！！

ずっと方向性について悩んでいて、執筆が止まっていた話ではあります、とりあえず出来る分は出してから悩もうという結論に達しまして。

もうこいの、私迷わない^ ^

突き進んでつて、たどり着いた先で見直した時に、文法を直したければ直せばいいんだもの。

吸収しきれてないうちにそれを扱えるほど器用じゃないもの。それを常に頭に入れておけば、書くほどに吸収されてくもんなんだから。今は、今の私の文を出す！欠点も何もかも、それはそれで実力なんだ。私っていう味もあるんだ。

そういう結論に、達したのですよ（^ ^）

つぐづく私つて・・・って感じな内容ですね（笑）

本編。

まだやるか。そこまでやるか！？ ってね。

でも、先日の・・・ネタバレになるので詳しく語れないですが、とにかく私の作品出すのが恥ずかしくなるような苦しみ具合を拝見しちゃいましたので（笑）

それに萌えつつも、ビリショーハー！ 恥ずかしこよハーハー！

（ - + ） キラキラキラ～

恥ずかしいけど好きな衝動は抑えられないのよ。こいつだつて・・・
「ニーヤが、新ちゃんが、ぼろぼろな話を書きたい・・・つ（ - +

） ハアハアハア

この偏った愛と執着が、私の執筆意欲だと思つて許して下さる（笑）

と言つわけで、更に撃たれてしまつた「ナン」。

場所が場所だけにちょっとびり重傷です。次回はぼろぼろ更に全開で行きますので楽しみにしてください（ 待て

ああ、そつ考へたらテンションあがつてきたぞ！ 書きたい・・・
ぼろぼろつーぬおおおおつ（燃）

私つてどんだけ・・・（ 。 * ）

手負い話でテンションあがつて、いつもより弾けちゃつてますが、お楽しみいただけましたでしょうか？^ ^

次話でもまた、お会いできる事を楽しみにしております^ ^（てか、私が頑張れ！）

04・唯一の希望

蘭の手前、大丈夫と言つたものの、実際彼の身体は殆ど限界に近かつた。彼女の膝を枕にするように頭を乗せられて、完全に体重を預けていた。それでも、少し身じろいだだけで鋭い痛みが走った。一刻一刻と体力が削がれてゆく。ただ、気絶するわけには行かないと思いつだけが意識を保つていた。

コナンは閉じかけた瞼をゆっくり持ち上げ、首を走行方向に傾けた。震んだ視界に映る車内のデジタル数字は、二十一時を指している。

「もつ……、こんな時間、か」

小さく呟いたコナンは、ふっと視線を上げた。彼の視界に、ちらと長い黒髪が映る。そしてその視界は、俯いている蘭によって少し暗い。

傷口をそつと抑えている彼女の手が震えているのもまた伝わった。唇を噛み、眉間にしわを寄せ、じつと見下ろして来る。

「ら、蘭姉ちゃん……大丈夫、だつて。んな、心配そうな顔すんなよ」

「無理しないで。さつきから朦朧としてるじゃない。血も、止血してるのに少しずつ出てて。ホントは、喋るだけでも相当辛いんじよ？」

彼女の声もまた、震えていた。それを見上げながら、コナンは無事な右手で彼女の服の胸下辺りを握り締めた。

「だ、だから大丈夫だよ。……うつ」

右手を引き寄せ、起き上がりうつとしたコナンの口から、つめき声が漏れた。右目を強く瞑り、何とか身体を起こす。蘭は慌てて、コナンを抱きかかえるように支えた。

「「」、コナン君… 無茶しないで…… 傷が！」

「いや、平氣。……」のまま、奴らに大人しく連れてかれて監禁されるのを、じつと寝て待つわけには、い、いかないから

話している内容とは裏腹に、コナンは顔を歪め苦しげに歯を食いしばる。呼吸を荒げながら、肩を抑えてうずくまつた。

「コナン君ー？」

「ど、とにかく…… オレがしつかりしてられないつひし、何とかしねーと」

肩を上下させながら苦しげに眩いたコナンは、背もたれに身体を預けた。額から大量の脂汗が滲む。

一瞬だけ、助手席に座っていた男が後ろを一瞥し、鼻で嘲笑った。それを確認して、コナンは蘭の耳元で小さく囁く。

「奴らの、ア、アジトまで、連れてかれるとやべーぞ…… も、目的地に着く前に」

「……うん、わかってる。それに、一刻も早くあなたの怪我お医者さんに見せたいから」

途切れ途切れのコナンの言葉に、蘭もまた小声で返す。コナンを覗き込む彼女の顔に、堅い決意がこもる。彼女の瞳に映るコナンの肩からは、じわりじわりと血が滲み出していた。

早く逃げ出さなければならない。そんな二人の気持ちとは裏腹に、

車は軽快なペースで走っていた。

変わつてゆく景色を、霞む横目で流し見る。デジタルの時計は十一時半にもなる。車に乗せられてからは一時間半ほど経つわけだが、先ほどから通るのはトンネルと高い壁が右側にそびえる道の繰り返しだ。道案内の看板が見あたらないからなんとも言えないが、そこは既に東京ではないのかも知れない。まるで見覚えのない景色が、視界の端に映つては消えた。

「……ず、随分、遠い場所に連れてくつもり、みてーだな」

コナンが前の二人に語りかけると、助手席の男だけが冷たい視線で振り向ぐ。蘭は突然ボリュームの高い声で言ったコナンを、ぎょっとした目で見下ろした。

コナンは相変わらず苦しげに肩を上下させ、俯き加減の首を何か起こして男を見据える。落ちそうになる臉を必死で保ちながらも、コナンの口元には挑発的な笑みが浮かんでいる。

助手席から、ククク、と低い笑いがコナンと蘭の耳に届く。

「フ、あの方にわざわざ来てもらうわけにも行かないからな。そんなに長旅が辛いなら、別におねんねしても構わないぜ？ お前は”出来損ないの名探偵”を完全なものにする為の大事な被験者だ。使い物にならなくなつたら困るからな」

「それで、生かしておけ、つてわけね……」

コナンは一言喋ると、重い吐息を漏らした。隣に座る蘭が、コナ

ンと男を交互に見つめ、首を捻る。

「出来損ないの名探偵って、何？ コナン君と何の関係があるの？」

蘭の疑問に、前の男から返る言葉は何もなかつた。蘭を一瞥し、再び嘲け笑つた男は、その歪めた口元を直さずに、前に向き直つた。しばらく男を睨みつけていた蘭がコナンに視線を移すと、コナンは微苦笑した。

「う、蘭姉ちゃんは、知らない方がいいよ……それ以上は、ほ、僕が……」

「！」コナン君！？」

弱弱しくはつきりしない口調で咳きかけたコナンは、言葉を止めて身体を丸めた。叫ぶ蘭に、横目で視線だけを送る。何とか言葉を喋ろうとするものの、開きっぱなしの彼の口からは、荒い呼吸だけが漏れる。

蘭はポケットからハンカチを取り出し、コナンの顔に滲み落ちる汗を拭つた。コナンは肩を抑えたままゆっくり体を起こし、深呼吸をしながら無理やり呼吸を鎮めた。顔を上げると、酷く心配そうな視線が降つてくる。

「『めん……。ち、ちょっと、傷が痛んだだけ、だから

「『ちよつと』って、真つ蒼じやない……』

コナンに顔色を指摘する蘭自身もまた、その状況から血の気が失せた蒼い顔をしている。困惑しきつて瞳を揺らす彼女に、コナンは小さく微笑を返した。そして、声を潜めて蘭の耳に口を近づけた。

「ガソ……リン」

「え？」

コナンが呟いた単語に、蘭もコナンにしか聞こえない極小さな声で聞き返した。コナンは再び、小声でさわやく。

「今どの位、残ってる？ 見える、でしょ？」

言われて、蘭は男達に気取られないように、身体を少し斜めに傾けて、運転席を覗き見た。ガソリンメーターは、限りなく“E”つまりエンドパーティの近くまで針を落としていた。

「も、もう少しで切れそうかも……」

蘭の言葉を聴いたコナンの口元に、不敵な笑みが浮かぶ。

「やつぱり、ね。燃費が悪そうな車だと思った……チャンスは、じきに来るからさ。あ、こっちは保険ね」

言いながら、コナンは胸につけていたボタンにそっと手を当てる。前から見えないよう、そこからシール状の発信機一枚はがし、蘭の服を掴むように装つて、服の裏にそれを貼り付けた。

「おー、さっきから何をこねこねと…」「な、何でもないよ……心配しててる蘭姉ちゃん、を、励ましてただけ……」

声を荒げて後ろを振り向いた男に、コナンは咄嗟に冷静な答えを返した。そして、再び蘭の耳に口を近づける。

「オレを信じる、蘭……か、必ず、逃がしてみせるから

ささやかれた言葉に、蘭の瞳が大きく見開いた。

「し、新一。やっぱり、あなたは本当に
「それもまた、逃げおおせた時に…… ゆ、ゆっくり、ヒ……」

眩いたコナンは、もう一度だけ小さく微笑した。しかし、そのま
ま力をなくし、カーブした車の遠心力に逆らえないまま、窓にこめ
かみをぶつけて頸垂れた。彼は首を落とし、前かがみになつたまま、
どうしようもなく薄れた意識を必死で留め続けた。

暗い駐車場に、ハイヒールの足音がやけに響いた。胸の谷間を見
せる服で、やけに大きな胸を強調した金髪ロングウェーブの女が、
そこに駐車されていた車の運転席に乗り込む。滑らかな手順でキー
を差込み、エンジンをつけた車のクーラーに髪を揺らせながら、女
は取り出した煙草に火をともした。

「出来損ないの名探偵……あの愚かな薬がどれほど大きな災いを呼
んだかしら」

目を細めた彼女は、妖艶な笑みをその口に浮かべた。火をつけた
煙草を口に運び、ゆっくりと煙を吐き出す。

「Sherry、そしてCooIe guy……あなた達はまだ、そ

の悲しみを理解出来ていな」「

彼女は空いている左手を眺め、眉を寄せる。その脳裏に、かつて通り魔に扮した自分を諭した少年の顔が浮かぶ。

「私の唯一の希望は、誰にも摘み取らせないわ」

低い声で呟いた彼女は、もう一度だけ白煙を吐き出すと、灰皿にまだ長い煙草を押し付けた。そして、アクセルの上に置いた足にゆっくりと重心をかけ、その暗い駐車場を後にした。

04・唯一の希望（後書き）

「んばんはー、現在、時刻は午前2時15分！（眠）
今日、本当は残つてた分のレス作業するつもりでしたが、眠くつて
仕方がないので明日時間がとれれば！」

台詞で悩んで大幅に予定時間から遅れるパターンは、私には凄く珍
しい事です^ ^ ;台詞はね、いつも頭にいらっしゃるキャラ任せに、
感覚で書いてるから。

勿論、どこかの台詞かつたら、あのラストの三言ですπ°

といつわけで、こんな日をこすりこすりな私ですが、今回もまたお
読みいただきましてありがとうございます♪

2パターンで迷つたのね。突然脱走する方向で事を起しさせるか、
クッショוןを置くか。

事を起こさせるパターンだと、更新がもつと遅くなつてた事だとは
思つのですが（展開を操りきる自信がつくまでは、ストック溜め続
けるので）

んでも、事を起こせるには急すぎて、こにはやつぱりクッショൺ
必要だろ？と言つ事で、伏線を孕ませての車内シーンを展開させて
いただきました。

あ、まだ出してないあの人とか、そろそろ出てくるんじゃないかな
ーと予言してみる（笑）

え？ 誰かつて？ そりやほら。あの人ですよ！

むう～ん（ーーー）流れが浮かんでも、それを操るつてむずかし
ーですよね^ ^

テンションがのつに乗つてゐる時には一瞬でぱぱぱーっとこけりやつ
のですが、手負いシーンな割にこの低いテンションせどりゆ(・へ
一へ A
やつぱり、口一やを苦しめずきなこよつにてーと抑えて書いてゐるから
かつ？

完全なるスランプ脱兎はまだ遠いのか・・・へへ
でも、苦しむ口一や展開はやつぱり好きだー＼書いて幸せ＼

もつと、もつと、血みどろにしたい、ハアハア言わせたい……
そんな欲求に素直にしたがつて文章書きたいつ

熱く手負い支援して下さる声もある事ですし、暴走しちゃえ私 とも思つけどね～（ ； ）ハツハツハ

・・・いやあ、でもこないだはホント嬉しかったです＼たくさんの
暖かいお言葉に感謝感激で 反応大歓迎ですホント＼＼
前回の反響に感激した朧月、一週間で、この先に続くストーリーの
妄想が相当沢山する事が出来ました＼

反応＝エネルギー源＝妄想＝執筆 の好循環ですから＼

久しぶりにレスが凄い楽しいと思つた＼時間がある時には、拝読し
たら即レス心がけたい今日この頃です＼

はわづ、とりあえずお礼の言葉が言いたかったのですが、「コメント
下さった方への私信っぽくなつてしまつて申し訳ございません＼＼

それでは、今回も見捨てずお読み下さつてありがとうございましたー
次話でもまたお会いできますよ＼＼＼＼＼

05・決意と動き

焼き魚を一口つまんだ後、先ほど割った卵を溶いてご飯にかけた。口の中にこれでもかという程ほおばり、箸を置いた右手の隣にあつたりモコンで、テレビの電源を入れた。

「平次、もう少し上品に食べられへんのか?」

静華に注意されるのを、口をリスのように膨らませながら横目で眺める。口の中のものを噛み碎きながら、おもむろに回したチャンネルで、彼は手を止めた。

『えー、続きまして次のニュースです。先ほど、東京都米花町の路上で……』

話すニュースキャスターの声に、そこにいる友人を思いながら、彼は再度卵かけご飯を口いっぱいに頬張り……

『江戸川コナン君七歳と、毛利蘭さん十七歳が何者かに撃たれて拉致された模様です』

テレビから聞こえたその内容に、口の中に入っていたものを全て噴いた。ちょうど向かいに座っていた和葉は、テレビの内容が耳に届く前に、平次の噴出した卵ご飯を浴びた。

「へ、平次！ 何すんのん！？」

怒りに震えながら、乱暴にテーブルを叩いて立ち上がった彼女だが、平次はそれを無視してテレビを指差した。

「アホ、ニコースちゃんと聞いてみ！」

「何やのん、言い訳したかて、アタシの不快感は……」

言いかけてゆつくりそのテレビに視線をやつた和葉は、ようやくその事実に気づいて、左手に持っていたはずの茶碗を落とした。

「これって、蘭ちゃんと口ナン君の事やんな？」

震える声の弦きに、平次は険しい顔で頷いた。食卓を囲んでいた平蔵や静華らも、眉根を寄せ、深刻な顔つきでニコースに耳を傾けた。

『尚、田撃した近隣の住民からの話によりますと、誘拐犯は全身黒服で身を包み、数名で拳銃を所持していたとの事です』

「……あー、つと。オレ、悪いねんけど出かけて来るわ」

頭をかきむしつて、黒目を右往左往させながら立ち上がった平次に、斜め前に居た平蔵は鋭い視線を送った。

「行くんか？ 現場に」

「……当たり前や。黙つてられるかいな。普通やつたら心配なんかせえへんけど、あの連中相手やつたら、あいつかてヤバイやん」

”黒服の男”と、ニコースを聞いて、平次の脳裏には、既に一つの確信しかなかつた。新一の身体を小さくした、黒尽くめの男達。本当に、それに撃たれて攫われたとしたら、あの無敵超人的な口ナンであつても、窮地に立たされている事だらう。

「大親友のピンチに黙つてられる程つれないねん、オレは」

そう宣言して口角を持ち上げた平次は、すぐ脇にかけてあつたバイクの鍵を持ち出した。

誘拐は、時間との勝負だ。今の時間を考へると、飛行機や新幹線のチケットを取るよりも、バイクを飛ばした方が早いだろう。それに、ニュースを聞きながら走らせるには、小回りが利くバイクの方が、乗つたら降りる自由のない大型旅客機より動きやすい。

いざゆかん、とヘルメットを手にして玄関に立つた時、すそを引つ張られ、危うくずつこけそうになつた。振り向くと、未だ顔中に卵ご飯のかすをつけたままの和葉が、必死な顔で見上げていた。

「ま、待つてえな、平次！ アタシも行く！」

「アホう！ お前はここに居れ！」

「せやけど、今平次も言つたやん。アタシかて、蘭ちゃんのピンチに黙つて待つてるなんて嫌やもん」

懇願するよつて、上目遣いの瞳を潤ませて話す和葉に、平次は頭を抱えた。

「絶対アカンて。危険やねん、ホンマに今回は
「け、けど。蘭ちゃんもコナン君も心配やし……アタシかて、何
かの役には」

「和葉ちゃん」

埒が明かない二人をじつと見つめていた静華は、和葉を制するよう静かな声を出した。振り返ると同時に、彼女の裾を持つ手が緩む。すばやく、平次は靴をはき、玄関の戸を開けた。

「スマンけど、留守番頼むで。……オレの事、もっと信じとけ、和

葉」

「へ、平次！？」

はつとして、慌てて背中を追おうとした和葉にそれだけを言い残して、平次は家を出て行った。

「平次……」

残された玄関で、か細く震える声で彼の名を呴いた彼女の肩を、静華がそっと抱く。

「ついてつて一緒に戦うんも女やつたら、大事な男を信じて待つんも女やで。例え大事な人が窮地に立たされとつても、こじぞつちゅう時を見極めてどっちを取るか選ばなアカン時もあるんや」

「お、おばちゃん」

「大事な和葉ちゃんを危険な田えにあわせたくない、つちゅうあのアホの胸中も少しば察したつてな。……じいじで、信じてじつと待てる大人になれへんやろか？」

眉をひそめながらも静華の言葉を聴いていた和葉は、少しの間無言で静華を見つめた後、力強く頷いた。

「ホンマ、おばちゃんの言うとおりや。平次やつたら、蘭ちゃんもコナン君も、平次自身の事も、皆なんとかするやろね……アタシも、蘭ちゃん見習おて、待つ女になるわ」

「せや。和葉ちゃんはホンマにええ子やね。……それに」

笑顔で和葉の頭を撫でながら、静華はそっと空いた右手にハンカチを持ち出した。

「そないな顔で外出してしもたら、こ近所中の噂になつてまう所やで

？」

そう言つて、すっかり和葉が取り忘れていた、平次の口から射出されたブツを、彼女はハンカチで優しくふき取つた。思い出したシヨックで口を開けて固まる和葉に、彼女は更にもう一言付け加える。

「バイクの一人乗りの最中に、冷静になつて大喧嘩したら危ないやろ？」

「ま、まさかおばちゃん……さつきまでの科白つてそつちが本音なん？」

「そり、息子と未来の娘が事故にあわんようにするのは、母親の役田やう?」

さらりと答えられて、脱力した。へたり込んだ和葉は、静華の手からハンカチを奪い取り、力を込めて顔中を拭つた。

そして、全部拭き終わつたと同時に、彼女は大きく息を吸い込んだ。

「平次のドアホーーー！」

和葉の叫びは、服部邸やその近所を巻き込んでこだました。

* * *

走る車の前の座席では、男達が何やら会話を交わしている。別段小さい声でもなかつたが、後部座席で俯くコナンには、酷く遠いも

のに感じた。耳から入った彼らの会話が、頭の中で言葉といつ形にならずに、ぐるぐる回っている。

車は、必ず近いうちに止まる。それがスタンダードか別の場所かはわからないが、その時が唯一つのチャンスだ。それまで気絶するわけには行かない。そう思いながら耐えてきた車旅であつたが、先ほどよりも意識の混濁は明らかに進んでいた。

一時間前には見えていたものが霞み、十数分前には聞き取れたものが、上手く聞こえなくなつた。頭の中ですら、少し前には理解していた筈の言葉を、意味のあるものとして捉えられなくなつているのだ。

朦朧と、閉じかけた瞳で、コナンは蘭を見上げた。とても緩慢な動きに、覗き込んだ蘭の心配する視線がぶつかつた。

「コナン君、凄い汗じゃない」

蘭はポケットから取り出したハンカチを、コナンの額や頬に這わせた。眉根を寄せて、彼女はコナンの目線まで身体をかがめてくる。いつもよりも青ざめた彼の唇が、呼吸をしようと必死でぱくぱく動く。

「ひんなに苦しそうなのに、何もしてあげられないなんて

視線を落とした蘭のハンカチを持つ手を、小さな手が捉え、掴んだ。彼はその手をそつと自分の方に引き寄せる。前が見えているのかいないのか、閉じかけた虚ろな眼で蘭を見あげていた彼は、その顔に微笑を作った。

「う、蘭……うん。安心、しろよ。……か、かなら、ず」

眩ぐ途中で、彼は眉間に深いしわを寄せ、頃垂れた。蘭は隣で瞳を大きく見開き、「コナンの名を呼んだ。一度呼んでも一度呼んでも応答せずに、ただ肩を揺らしてハアハアと呼吸する彼に、蘭の顔から血の気が引いた。

「コナン君っ」

蘭が短い叫びを上げると、助手席で足を組んでいた男はちらりと後ろを振り向き、口角を高く持ち上げた。

「やつとおねんねか？」名探偵の坊やは

やつ言ひて、男はからかいつように銃口を向けた。蘭は震えながら「コナンを抱きしめ、男を強く睨みつけた。

「もひ、コナン君に怪我一つ負わさせない」

男に軽蔑のまなざしを向けながら、蘭は腕の中でされるがままに従つコナンを見つめた。

「無理をせじめんなね……」

その耳元に口を近づけるよつとして、彼女は何度も、何度も眩いだ。

「私が、絶対守つてあげるから……絶対、絶対……」

震えながら言い続ける蘭のまなざしには、決意の光がさしていた。

* * *

その、少し風変わりな形をした家の前に止まつた車から、金髪の女性が降りてきた。

阿笠と書かれた標識の文字を指でなぞり、彼女は目を細めた。赤く紅のついた唇の両端を持ち上げ、彼女はそつと、チャイムを鳴らした。

「さあ、Sherry。あなたは何処まで自分の罪に責任を取れるのかしり」

家主が玄関の戸を開けるまでの間に、小さく呟いた彼女は懐から小さな拳銃を取り出し、その手中に握りこんだ。

ともなくして、開いた玄関の戸から顔を見せた幼い少女に、彼女は撃鉄をおろした状態の銃口を向けた。

向き合つ少女の瞳孔が、驚きと困惑に支配され、開ききる。その様を眺めながら、彼女は再度口端をつづ上げ、妖しく笑つて見せた。

「Hello. Sherry……鬼！」ほ、おしまいく

「……べ、ベルモット…」

こんばんは、朧月です^v

第五話の投稿・・・・実は、ベルモットシーンをこいつに入れなかつたが為に、入れる筈だつたコニヤ蘭シーンを削り取つて後へ。ずっと続く蘭ちゃんのコナンを守りたい思いがよつやく言葉として蘭ちゃんの口から

わい、そろそろ登場させないとだよねえ　と言つ事で、平次さんMeet初登場ですキヤッ（^_^*）（*^_^）キヤッ
平ちゃんはいつもどうしても出したいキャラなので出現率高いですが、彼を出すと必ずどつかにギャグ入れなきやなんないのが辛いよね～（笑）

・・・ただでさえ苦手なギャグが、出すことにネタ切れしてつてる気がしなくもない^_^；

いや、私の勝手なこだわりではあるのですが。
和葉も好きですが、今回はお留守番して貰いました。あの子にまでばたばた動かれると、收拾つかなくなるんだもん（^__^・それにね、静華さんに言わせた言葉がそのまま私の本音でもあるし。

そして、彼女もようやく登場～

普通のキャラ順位はちよつと違つけど、私が小説を書く上での順位つて言つとね。コニヤ、平次、哀ちゃんつて感じなの。この三人ほぼ同位。普通はそうだな、新一、平次、コニヤ、哀ちゃんの順番が妥当かな。出さなかつた名前がどうでもいいわけじゃないけど。大好きだけどっ！

んでもつて、四話で張つたベルさん伏線、五話でも継続して更に張つつけました（笑）

ベル姉さんホント大好きだーvvv

こんな展開になりましたが、今回もまたお読みいただきましてありがとうございましたーvv

これから（明日になるかもだけど）レスも返して来ようと思ふに決め
つつ^_^

次話でもまたどうかお付き合いでいただけたら嬉しいですvv

それでは、今回も十分お楽しみいただけましたでしょうか？^_^
個人的に、出だしシーン思いつき外してそうで恐ろしいのですが
つ（ドキドキ）

でも私つてホントどれだけハアハアさせたいんだろーねえ（笑）
・・・段々、あとがきが変態的になつてゆく。

自分を見下ろす冷たい瞳に、少女の視界は絶望の色に支配された。少女に拳銃を向けるベルモットの口元には、冷笑が浮かんだ。ゆっくりと前へ進み出るベルモットと距離を保つように、哀は部屋の中へ後ずさつた。

「ねえ、Sherry? 許して頂戴ね。全ての原因を作ったのは貴方なのよ」

「原因?」

「ええ、そう」

尋ね返す哀に、ベルモットはまた一步、足を踏み出した。既に、彼女は玄関にまで足を踏み入れている。外の暗がりに目が慣れていたのか、微かに目を細めながら言った。

「バー・ボンに仕掛けられたもの、気づいてなかつたわね? 無防備に解毒剤が出来たなんて話をするから、あの坊やまで犠牲になつたわ」

「……まさか、彼に何かしたの!?」

冷静で淡々とした口調のベルモットとは対照的に、哀は突然声を荒げた。数秒前までは固い表情の中に、どこか冷めた心が映っていた。だが、”坊や”の単語を出した瞬間に、哀の表情は凍りついた。それを視界に納めながらも、ベルモットの目が細まる。

哀を見下ろすベルモットは、めいっぱいの皮肉を込めて嘲笑した。

「どうしたの、シャーリー。随分狼狽したものね」「はぐらかさないで、答えて!……答えなさい!」

銃を突きつけられたままの状態で、哀はついに命令口調で怒鳴り声をあげた。額から一筋汗を流しながら、彼女はベルモットの銃口から目を離さないようにつとめた。歯を食いしばりながら、銃口とベルモットを交互にきつと睨み付ける。

ベルモットはまた一步足を進めた。

「彼は、組織の手に落ちたわ。負傷して、かわいいガールフレンド共々ね」

「かわいいガールフレンドって、あの探偵事務所の彼女の事なの？ 負傷つて何！」

そこまで捲くし立てた哀に、ベルモットの顔色が少々変わった。軽く舌打ちしたベルモットは、眉根にしわを刻む。明らかに不快を映した事が、哀にも伝わる。

「……一々つるせこ女ね、あなたは。自分ひとりじゃ身を守る事すらままならない癖に。そうよ、江戸川コナンは撃たれて動けず、毛利蘭は彼を守るために犠牲になつたのよ。今頃は、捕らわれた車内でお互い慰めあつてるんじゃない？」

哀はきつく拳を握り締めた。ベルモットの眼光が鋭くその様を射抜いている。足を止めた哀の元に、ベルモットは更に数歩歩み寄り、目線を合わせるようにしゃがむ。哀の微かに震える肩に手を置いて、銃口をそつと哀の胸元　心臓付近　にまで落とした。

「あなたがあんな毒薬を作らなければ……彼もあなたも、そしてあなたの何も知らないエンジェルも巻き添えにならなくて済んだわ。そう、あなたのせいなのよ。あなたが、」

そこで一日間を置いた彼女は、哀の耳元に口を持つてゆく。そして、口を動かした。何かを喋っているのか、ただ耳に息でも吹きかけているのか、それは傍目には分からない。至近距離で聞こうとしても、彼女の“声”は、哀の鼓膜以外には届いていないごく小さな囁きなのだ。

哀だけが、段々と目を見開き、自分の耳元をぎょっとした様子で見つめていた。

「だから、責任は取りなさい、Sherry。私は、何があつても約束を果たすつもりなんだから」

「……私が犠牲になれば、彼は助かるの？」

見上げ、懇願する哀の揺れる瞳を見つめるベルモットの口元に、緩やかな右上がりなカーブが生まれる。

「さあ？ そんなの知らないわ。……その後の事は、彼次第よ」

冷たい声が、廊下に響いた。哀は唇をきつくかみ締める。

突然の動きだった。哀は彼女の手を振りほどき、部屋へと走り出した。

拳銃を発砲しようともせず、ベルモットは再び立ち上がると、ゆっくりと哀を追つた。

「なんのつもり？ Sherry

「……そんな曖昧な答えの為に、犠牲になるつもりはないわ！ 約束して。彼を必ず助けてくれるって」

叫びながら、哀は続いて部屋に入つてくるベルモットに、包丁を突き出した。一瞬、目と口をまるくぱっかり開けたベルモットは、小馬鹿にした嘲笑をこぼす。

「随分物騒なものを持ち出して。まさか、そんなもので抵抗するつもり？」

「丸腰よつはマシよ」

ベルモットをきつく睨みあげる袞は、堂々とまるで根拠など存在しない筈の言葉を口走った。

ベルモットの口から、小さな吐息が漏れる。

「……まあ、仕方ないわね。抵抗した場合の許可も出でているわ

そう呴いたベルモットは、目を細めて冷笑を浮かべた。

「愚かな女ね」

嘲りながら、ベルモットは引き金を引いた。

パシュッ。

サイレンサーがつけられた拳銃の、乾いた音が響いた。銃口からは、白煙が浮かび出る。ベルモットは興味がなさそうに踵を返し、情け程度に電気を消すと、玄関の戸を開けた。

女が立ち去つた十数秒後、阿笠邸は爆音とともに炎上した。燃え上がるその家に一瞬だけ視線を移した女は、口元に笑みを作つた。

「悪く思わないでね、Sherry

呴いた女の声色が、空氣に溶けきるより前に、車のドアが閉まる音にかき消された。間をおかず、艶やかなボディをした車が一台、そこから走り去り夜の闇に消えて行つた。

「……君、……ナン君？」

呼ばれる声に応えようとしたものの、体中を支配する気持ちの悪さに、彼は顔をしかめた。目を開けると、記憶の最後とは少し違った景色が広がっていて、ぼんやりした頭で今ある状況を少し思案した。

めまいが止まらない為、最初は顔を上げるのも億劫だった。無事な片手で額を押さえては見たが、かすんだ視界に映る車のシートの色すらも、久しづびりに見た気がした。そこで、ようやく少し意識が落ちていた事に気づく。それが一瞬だったのか、数秒だったのか数分だったのかは定かではないのだが。

「大丈夫？」

「蘭？…………う、く。げほつ」

上から気遣わしげに声を掛けられ、コナンは顔を上げた。しかし、歪んだ視界と吐き気によつて、再度俯き口を抑える。同時に酷い寒氣にも襲われ、小さく漏れたうめき声と共に体を震わせた。隣に座っている蘭が、身を乗り出す。

「気持ち悪いの？ 平気？」

「ああ、平気。ちょっと寒くて、吐き気がした、だけだから」「ちょ、ちょっと。それって……」

「車酔い、しただけだよ。ずっと移動し、してるから、さつきから、田が回つて」

そこまで言つたコナンは、口を開いたまま、意識しなければままたらない呼吸を整えた。

蘭は、長息を漏らす。

「でもよかつた……意識あつて。俯いたまま、何も喋らなくなつて、ずっと苦しそうにしてたから、もう駄目なのかと思つて」

「……し、心配かけたみてー、だな。んで？」「うーん、どこのわかる？」

「ううん、どつかから川の流れる音が聞こえる気がするけど、何処だかまでは」

「か、川か」

コナンは緩慢な動きで、車の窓に視線を移した。そして、彼は目を丸くした。先ほどの流れていた景色とは違い、止まっている。そして、その景色を見て初めて、運転席と助手席を見やる。

「今、と、止まつて、るのか？ 奴らは……」

「うん。とりあえずここはどつかの車庫よ。の人たち、一人は多分ガソリンを取りに行つてて、もう一人は途中で誰かに電話もらつて、急に慌てて……本當ならすぐあなたを抱えて逃げ出したかったけど、ごめんね。無理だったみたい」

言い終えて悲しみ混じりの笑みをした彼女の身体に、コナンは視線を送つた。そこで初めて、彼女にきつく巻きついたロープと、前の座席に手錠で繋がれた彼女の両手に気がつく。

「し、縛ら……れて、るんだ」

「うん、抵抗はしたんだけど。……頑張つたけどドアも開かないし、人が通る場所でもないみたいだし、これでガソリン補充されたら、多分もうこのまま私達……」

それを聞いたコナンは、顔をしかめながら、手錠に手を伸ばした。だが、うめき声が漏れるだけで、重い身体からは、怪我のない腕すらも自由に上がらない。悔しくて仕方がないコナンは、歯を食い縛つた。

「はあっ、はあ……」

無理に身体を動かしたせいで、呼吸が乱れた。うずくまり、目を堅く閉じながらも、コナンは必死でそこに手を伸ばした。そんな様子に、蘭の瞳が潤む。

「しつかりして！ 無理だよ、いくらあなたでも、縄はともかく、手錠の方は」「け、けど、前の座席を……動かせれば、縄の方はオレが幾らでもなんとか」

「今は、座ってるだけでやつとなんでしょ？ それでももし足が動くなら、本当は、私を置いて逃げて欲しいけど……あなたが聞き分けてくれるわけないか」

小さな声で呟いた彼女は、頭を伏せた。哀しく俯きがちの瞳のまま、彼女は口元に笑みを模る。全てを悟りきったような微笑で、彼女は囁くように言った。

「もう、一人きりで話せる機会つて最後かも知れないよね……コナン君」「な、何言つてんだ」

「でも、新一って呼んだ方が正しいのかな？　あの人たちが居ない今なら、問題ないでしょ？　最後に、最後くらいは本当の事教えて欲しいよ」

反論しかけたコナンの言葉に耳を貸そうともせず、彼女は言い切つた。かみ締められた唇が、微かに震えている。その彼女が泣いている、とわかつたのは、彼の伸ばしていた手に一滴の涙が着地したからだ。

「蘭……」

「あなただって、さつきからずつと迷つてたんでしょう？　言葉遣いが、新一みたいになつたり、コナン君みたいになつたり」

蘭を見上げながら、彼は数秒沈黙し、考え込んだ。

「……そう、だつた？」
「うん、判つてなかつたの？」

聞き返したコナンに、蘭は小首をかしげ、微笑した。コナンは頭に今までの会話を振り返る。

「あ、ああ、確かに……そうだつたか。ら、蘭、オレは、」

俯きかけた首を再び戻したコナンは、偶然目に入った窓の外に驚愕した。今にも閉じそうなほど虚ろに落ちかけていたまぶたが、その衝撃にこれ以上ないほど持ち上がった。

軽く握られた拳に、車窓を数回叩かれた。コナンの隣で、蘭も車に繫がれたまま目を丸くした。覗き込んでくるその視線を眺めながら、再びコナンの目は虚ろに戻り、再度感じた吐き気と共に、その視界は歪み、ぶれた。思い切り倒れこみそくなつた体を何とか持

ちじたえさせ、田を擦ると、コナンは再びそこを見上げた。

どうもこんにちは、今回も変わらずお読みくださいありがとうございました。//

いやはや、前回はお返事お待たせしてしまって(^ _ ^)；昨日しつかりお返しさせていただきました。今回こそは頂いたら即日返信頑張るぞvvv！

ベル姐さんと哀ちゃんのシーン、書いてて滅茶苦茶楽しかったですvv
二人とも大好きなキャラだからね、楽しくて当然なのだけれども。
・・・え？ 一体どうなったのかって？ それはホラ、ねえ。言つ
ちゃつたら焦らしがいがホラ（笑）

バー・ボン、名前だけ出したけど、原作の設定には極力不可侵でいた
い。妙な考察だとしてさ、文章として物語の中で見せられると、
結構信じちゃうじゃない？ だから。

一方、車の中にいる一人には、少し動きが・・・ですね
蘭の扱いについて、どうするか迷ったのだけれども。まさか縛らず
に車に一人残して行くわけは絶対にないと思いまして。
けど、ロープで縛つただけなら、コナンに解かれてしまうでしょう。
手錠だけなら、車の椅子破壊するぐらいやるよきっとあの子は（笑）
なので、ああなった、と。
コニヤンは体動かすのもかなり億劫な状態なわけですから、別に縛
られる事もなくフリーでいます。ビーセ逃げられないしね。
そしてやってきた人物は、果てさて誰でしょう

七話は、もしかしたら次週更新無理かも知れません（頑張るけどね）
私の場合、テンションと気の乗り具合が全てを決めるから。

てか、ここまできて、あらすじとの食い違いに首を捻つてる方ー。
ホラ、手えあげてー。

いるよね、絶対いるよね？ あなたは、うん、正しいです
勿論、あらすじは間違いありません。ということは…？ テスヨ。

次回第七話・・・・・

「あなたがどっちでもいいの。何より大切って事に変わりはないから。今までありがとう、コナン君……大好きよ、新一。だから、ごめんね。

バイバイ。新一、コナン君」

そして彼女は、慈愛に満ちた笑みを浮かべ、風に揺れた髪を耳にかける。蘭は別れを惜しみながら、見つめるのは最後になるかもしれない少年を目を細めて焼き付けた。

＊＊＊

第七話、『別れ』

どうかお楽しみ下さいませ。

まだ未執筆部分なので、実際の台詞とは少々異なる可能性もあります。あらかじめご了承下さいませ。

蘭もコナンも、外から窓を覗きこむよつこじやがむその姿を、半ば呆然と見つめていた。呆然と言えども、二人の驚き方は質が違うものだつた。

“驚き”？

そんな単純なものではない。ただただ、“何故？”と首を傾げたくなるものだ。

そう、今訪れているこの何とも言いがたい驚嘆に値する現状は、あまりにも突拍子もない出来事だつた。

一人は間抜けなほど、視線を固定したまま口をぱっくり開けていた。

車窓の向こうにいるその人は、小さくため息をつき、徐に、持っていた鍵を一回転させた。助手席側の戸が開けられた。そこから、シニカルな笑みが車内に入り込んでくる。

コナンがぎょっとしたのは、このすぐ後の出来事だ。すっと伸びた彼女の手が、蘭の手錠にかかる。

「な、にしてる？」

微かにげんなりした顔つきのコナンから、低く暗い声が漏れ出た。うざつたそうに身じろぎした彼は、蘭の元に崩れかけていた体制を敢えて立て直す。眉をしかめながらも、下唇を尖らせ、その人物をじっと眺めた。

精一杯の虚勢ではあつた　それは、自分も蘭も判つているが、あまり弱みを見せたくはなかつた。弱みを見せた瞬間に、彼女が何かをやらかしそうで。

「折角の好意は受けるものよ、そんな嫌そうな顔しないで」「だ、だから。何してるって、聞いてんだ」

「見て判らない？ 手錠を解いてあげてるんでしょ。この車が下の道をこそそこ走ってる間に、高速飛ばして来てあげたのよ、感謝ぐらい欲しいものよ」

前に乗り出した体勢のせいで、彼女の長いブロンドヘアが耳から落ちかけた。それを緩慢な仕草で左耳に掛けなおし、持っていた小さな鍵を手錠の鍵穴にはめる。

力チリ、と音が響き蘭を拘束していた手錠が外れた。驚愕のあまり思考が完全に停止していた蘭は、その音に我に返り、慌てて縄を解くべく縛り目に手をやつた。

「……ま、まさか、本当にオレ達、を、助けに来たつてのか？ ベルモット！」

じつとその様子を眺めていたコナンが、耐えられずに彼女に問いかける。彼女は意味ありげに目を細め、微笑を見せる。

「まあ、シェリーと違つて、あなた達の事はこれでも大切に思つているのよ。手荒な真似はしたくないと思つし」

「シェリーだと？」

話しかけたベルモットの言葉に、コナンは目を見開き、声をあげた。忘れていた、もう一人の組織に狙われている少女の事を。声を張り上げた為に、激痛が走つた肩の傷を抑える。それでも、彼は三度ほど乱れた呼吸を整えながら、彼女の目をきつく睨み付けた。

「灰原はどうなった！ な、何かしたのか？」

口調を荒げたコナンに、隣に居た蘭が驚きの視線を送った。繩は胸から足まで随分きつく縛られているようで、中々にてこずっている。

ベルモットは無言で冷笑を浮かべた。しかし、場が沈黙する事はない。繩に手をかけながら、蘭はコナンを見やり、震える声で言った。

「何、コナン君。哀ちゃんも何か関係あるの？」

「え？」

「それに、あの、クリス・ヴィンヤードさんですよね？ アメリカの女優の」

答えに困惑のコナンに構わず、蘭は困惑を隠せない様子で突然現れた彼女に尋ねた。ベルモットは小さく笑う。

「ええ。『初めてまして』」

「どうして、ここに？」

言いかけた言葉を遮断するように、彼女は口元で人差し指を立てた。そして、クールな口調で蘭にささやきかける。

「Secret makes a woman woman……女は秘密を飾つて美しくなるのよ、あなたもレディなら覚えておきなさいな。それに、優雅に語り合つてる時間もないんじゃない？ 私がしてあげられるのは、せいぜいあなたを自由にしてあげる事ぐらい。彼らが帰ってきたら台無しなよ？」

「そ、そうだよ……後で、説明する、から。今は急がなきや」

「ナンにも横からせかされて、はつとした蘭が、慌てて最後の結び目を解いた。そして、解放された手足を一回だけぶらぶらほぐした後、コナンを抱き上げた。

体が浮いた時、一瞬苦悶の表情を浮かべたコナンは、蘭を勇気付けるように彼女の服を強く握り締めた。蘭と田が合つなり、コナンは強かに頷いた。

「無事に、逃げられたら、こ、今度こそ、オレの口で……全部教えてやつから、よ」

「うん」

微笑して小さく頷いた蘭は、勢いよく車の戸を開け、外に出た。既に、車に腕組をして寄りかかっていたベルモットは、微笑を崩さぬまま一人に告げる。

「車庫から出たら、五十メートルぐらい道路を走って、そこに川原へ降りる階段が見つかるわ。降りた所から右に川に沿つて進みなさい。それが一番判りやすい駅への道だから」

「え、駅だと？」

「ええ。タクシーはこの辺滅多に掴まらないから、歩いて駅まで行くしかないのよ。逃げおおせた所で、関西に住んでるお友達にでも、病院に同伴してもらいいなさい。怪我人のあなたとその子だけじゃ、病院で万一組織に遭遇しても対応できないでしそうしね」

聞き返したコナンに、彼女は微かに早口で答えた。そつと懐から取り出した携帯電話をコナンの右手に渡した。ぎょっとするコナンに、彼女は再度告げる。

「Sherryの携帯電話よ。逃げる時、何かと必要じゃない？」

「……は、灰原は、無事、なのかな？」

「ナンが最後にした問いに、ベルモットは数秒沈黙の間を置いて、答える。

「組織が私にした命令は、Sheerryをボスの元へ連れて行く事よ。叶わないなら、射殺しても構わないって許可ももらってるわ」

「し、射殺だと？ う。くあつ」

思わず身を乗り出したコナンが、響いた鈍痛に顔をしかめた。彼を抱いている蘭は全く話についていけずに、頭を真白にしながら、ただその残酷さに思わず眉をひそめる。

そんな二人の反応を見ながら、ベルモットは言葉を続けた。

「忘れないでね、Cooey。私は、自分で決めた『約束』は必ず守るわ」「やくそく……」

呟くようにその単語を口にしたコナンは、携帯電話とベルモットを見比べた。少し 時間にするとほんの数秒だが、思考を脳内に巡らせて、彼は小さく頷いた。

「ああ、判った」

それだけ言葉にして、彼は力強く渡された携帯電話を握り締めた。ベルモットの口元に、シニカルな笑みが浮かぶ。

「さっさと行きなさい、Angelに、Silver bullet。あなた達が組織の手に落ちて死なれでもしたら、私が困るのよ」

「行こう、蘭」

「うん。あの、ありがとうございました。あなたがいい人なのか悪

い人なのかよく判らないけど、凄く助かりました」

蘭は未だ困惑したまま、ベルモットに深々と頭を下げた。向かうベルモットが、笑顔のまま小首を傾げた。

「お礼はいつかでいいから、本当にそろそろ時間ぎりぎりよ。何とか無事逃げおおせなさい Good luck」

そう言つてひらひらと手を振るベルモットをその場に残し、蘭はコナンを抱えたまま車庫の出口へと走った。

動搖がずっと残っているのだろう、蘭は何度も後ろを振り向きながら、言われた通りの道を急いだ。

降りた川原を、蘭は必死で走っていた。彼女の腕にお姫様抱っこ形で持ち上げられたコナンは、しばらく右手に持った携帯電話を見ていた。

悪いと思いつつも、アドレス帳を開く。そこには、自分や博士、探偵団達などの名前があった。更に、メールにはやり取りした覚えのある文面も。

確かにそれは、灰原哀の携帯電話に相違なかった。

「コナン君」

突然上から声を掛けられて、彼は視線を上げた。蘭は走る足を止

めないまま、言いにくそうに黒田を不規則に動かした。

「何が起きてるのかとか、そんな事もつこの際逃げ切るまでは聞かないけど……さつき言ってた話、どういう事なの？」

具体的な主語を省いた科白でも、コナンには彼女の意図する所がしつかり伝わった。しかし、一瞬答えに詰まつたコナンに、彼女は再度言葉を変えて尋ねる。

「話に出てきたシェリーって、哀ちゃんの事でしょ？ 大丈夫なのかな。それにあの人、助けてくれたけど、いい人なの？ 悪い人なの？」

「だ、大丈夫、さ。ベルモット ク里斯の考へてる事は、オレにも判らぬ一けど。そ、組織の中では一番話が通じるんじゃねー、か？」

途切れ途切れにそれだけ言い終えて、コナンは息を吐いた。そして、再度携帯を眺める。頭の中に、覚えている限りの電話番号を浮かべた。一つ一つ、関係のないものを消去していく、確信した一つの番号を打ち込んだ。

高速を走っていた彼は、丁度サービスエリアに差し掛かる所でポケットに一瞬視線を送つた。しかし、そのままバイクを走らせる、サービスエリア内に入る。彼はバイクに乗つたままズボンのポケッ

トから携帯電話を取り出すと、着信履歴に首を傾げた。

「どうからや？」「れ」

知らない番号だ。もしかしたら、田下誘拐されている彼と彼女関係の電話かと思ったのだが、それは江戸川コナンの携帯からでも、工藤新一のものでも毛利蘭のものでもなかつた。

平次は小さく息をつくと、発信ボタンを押した。耳につけていたイヤホンを外し、代わりに手に持つた携帯電話を押し当てる。

「もしもーし。どうさんや？」

相手が出るなり、投げやりで不躾な言葉を発した平次だが、返つて来た声に一瞬で顔色を変えた。目を丸くしたまま、耳に当てた携帯電話を凝視する。

「工藤……！　お前、今どないしてん？」

口調が荒くなつたのを、電話の向こうでも察知したのだろう。事情を知つてゐる事前提の、苦笑交じりの言葉が返つてくる。まさに逃げてゐる最中だが、今何処に居る？　という単純明快な質問返しだ。

その科白に、妙な違和感を覚える。科白自体にではなく、耳に届く声にと言つた方が正しいかもしない。まるで数キロの距離を全速力で走つた後のよつた荒い吐息交じりの、途切れ途切れではつきりしない口調だ。

「大丈夫なんか？　お前」

『あ、ああ。撃たれたけど……急所じゃねー、から、大丈夫だよ。米花町に戻るのはやべーし、どつかで待ち合わせて拾つて欲しいん

だ。蘭も』

「構へんけど、どこまでやつたら来れそうや。そういう事情やつたら大阪で匿つたるけど。まあ、早いうち合流した方がええやろから、行くとここまでバイク飛ばしたるで。一応、名古屋までならもう近いねん」

『……は、はあ？ 何やつてんだ』

予想もしていなかつたらしい素つ頓狂な声に、思わず苦笑いが浮かんだ。

「和葉、家に呼んで夕飯食つとつたら、ニコースでお前の事やつてたんや。ほんで、力になつたろで、急いで家出て東京までバイク飛ばそつとしたつたんやないか」

『な、なるほど？ もうニコースで 意外だな』

「せやなあ、何や近所の誰かが偶然家ん中から見たそうやで。それでも、男たちの人相みたいなもんは判らへんかつたようやけど」

どの道コナンと蘭がさらわれたと判るのは時間の問題だったのだから、気づいたのが早いだけで何も判つていないと変わらない。平次は微苦笑を浮かべながら、バイクの鍵穴に差し込んでいた鍵を回した。

「ほんで、どこまで行こか？」

『……名古屋。近いなら、そこでいい』

「そんなら、駅出たとこで待つてたる。時間合わせて大阪まで早く帰れる電車あつたら切符買^うとくから、つく五分前には連絡せえよ

『ああ……』

返事が聞こえなくなつたまま、電話が切れたのを確認して、平次はサービスエリアを後にした。

今回もお読みいただきまして、ありがとうございます。▼

え・・・つと(滝汗)

「ダメ・・・」(汗) 言ったことは判つてしまふへええ、そりやも
うひとつでも判つてます。」さうともです。

朧月は大嘘つきです（滝汗）色々な意味で大嘘つきです。
とりあえず、まずはあの前後編ものの後書きを見てくださった方に
お詫び。
結局、今までアップできませんでした。

更に、前回の後書きの予告・・・（滝汗）

ええ、どちらも同じ理由です。

せひまつりでござりました。

ただ、パソコンに中々触れられる時間がとれず、まだその件の途中までしか出来てないのですね（もうすぐではあります）
で、これを逃すとまた来週になっちゃうーと思つもあり、更に、
文字数もこの他多くなつた為・・・

それなら、丁度いい場所で区切っちゃおうという結論に達しまして。当初予定の『別れ』は八話に繰越です。スママセンへへ……って言つてもほん八話終わってるから、七話と同時に出す事も、もうちょっと時間使えば可能だったけどね、来週も更に忙しいので、ストックが欲しくて。

・・・そのせいで迷つたよ、七話のサブタイへへ；

さて、哀ちゃんの安否（というか行方）やいかに！（笑）
一応、ベル姉さんの性格はより原作をを目指してやつてゐつもりです
（^――^；ので、その発言もまた然り。

最初の驚き方については、あえて言わずとも判るかな？と思つたのですが。

蘭については、その場所に女優・クリスが顔を出した事への驚きで。
コナンは、そのタイミングでまさかのベルモット登場に驚いた感じ
で。（考えが読めなかつたり云々）

ベル姉さんが哀ちゃんの携帯持つてて、それをコナンに渡す。なら
哀ちゃん本人はどうした！ となりますね
その辺は……

『Secret makes a woman woman . . .
教えられないわ』推理してみるとよいかも

……川、なんの伏線かと思われたかも知れませんが。ごめん、ただ
の道案内（^――^；

ベルさんじゃない人が来るパターンだと、あれが伏線となつて、川
編が存在した事はしたのですが。

ただ、コナンがね。その浮かんでたシーンに耐えられる余力がある
とも思えないし。

その他理由からも、より自然な方を採用したわけです。

ていうかさ、大変だつたのよ。

土地勘まるでない私が、色々と調べたりして。更に、横浜に住んで
て、修学旅行以外関東から出た事ないような女ですから。免許もな
いし。

でも父がタクシーやつてるので、多少の距離感土地勘ぐらいは判るだろうと判断して、大阪からどの位時間かければどこあたりにへりで調べてみたり。

名古屋になつたのは、調べぬいた結果です（^—^；一番時間間隔のイメージ的にいい場所と判断して。

・・・自信あんまりないけど（^_^；

と言つわけで、平次はバイクで高速途中つて事になりました。

なので、次回は予告にたがわづ今度こそあんなノリの『別れ』をお送りいたします。あ、お待たせしますレス関係もお休み中にお返しするつもりです 忙しくなる前に^_^；
どうぞまたお楽しみいただけましたら幸いですー＼

PS・それは夢か現実か……、出来れば休み中に頑張る^__^ひらり
も、Eternal Love後書きでのお約束守れずな遅筆ぶり
申し訳ございませんです。

電話を切ったコナンは、疲れきった様子で蘭の腕に脱力した。

「だ、大丈夫？」

「……ああ。も、もうすぐ、駅だな」

「うん、すぐや。電話服部君でしょ？」

覗き込むよにして言った蘭の表情が、一瞬固まつた。駅はもう道路を渡つたすぐ先だというのに、走つていた足を止め、振り返る。

「蘭？」

数秒間首を後ろに向けたままじっと遠くを見つめていた蘭に、コナンが咳きかける。蘭は眉を寄せ、首を捻つたが、コナンの呼びかける声にすぐ顔の向きを戻した。

見上げるコナンを安心させるような、柔らかい微笑が彼女の顔に浮かぶ。

「「めんね、何でもなかつたみたい」

「……な、何かあつたら、教えろよ」

「うん」

頷いた彼女は、そのまま微かな苦笑も交えて軽く舌を出す。そんな彼女を視界に入れながらも、コナンは再度目を閉じた。

「絶対、守つてあげるから」

蘭は、小さく咳き、コナンを抱き上げている両手に少し力を込め

た。

抱かれたコナンに、意識はあった。だから、彼女が小さく呟いた科白も一応耳に届いている。だが、思考力は最底にまで落ちていて、その変に力の籠った科白が意味する彼女の真意まで見抜けなかつた。

「名古屋だよね？」

「　　ん」

彼女の問いに、目を瞑つたままで小さく返事を返す。「じゃじゃ」と動くのは、彼女が恐らくポケットに入れていた財布を出そうとしているのだ。手荷物は奪われてしまつたから、あるのは偶然レストランで食べた後にポケットにしまわれた財布のみだ。

コナンを片腕に持ち替えた彼女は、財布を開いたまま逡巡した。

「電車で大丈夫かな？　」こんな時間だから本数も少ないけど

「　　ああ」

彼女の尋ねる声に、再度コナンはか細い声だけで答えた。

ベルモットの登場に驚いて意識を醒まされたり、先程の電話でしつかりせねばと気を張り詰めていたり、無理をしすぎたようだ。ただでさえ最悪だつた体調が、気を緩めた途端にどん底まで落ちた。

とりあえず、吐き気は車で感じた時よりもずっと酷くなつていた。蘭に抱きかかえられて走つていた間は、歪んで霞み狭まつっていた視界が終始不規則に揺らされていた。体もまた、一キロ以上揺れば怪我にも障る　最も、どうしようもない吐き気が怪我のせいか酔いのせいかなんて事はわからないのだが。

いつの間に、電車に乗せられただろう。

体が蘭の手から離れて、シートに腰掛けさせられた。そのまま、彼女の膝に頭を乗せる。

「よかつたね、そんなに待たないで新幹線乗れ。具合どう?」

尋ねられて、コナンはようやく目を開けた。覗き込んでくる彼女がぼんやりと映る。

「ぐ、へこき」

スマーズに行かない口調の分は、顔に微笑を作つて安心させる。そんなコナンの目前に、蘭は救急セットを見せた。

「これ、駅で売つてたから。ちゃんと止血と手当てしなおさう? 服部君と合流できたら、すぐにでも深夜病院連れてつてもらおうね」

「ああ」

短く答えた後で、またコナンは目を閉じた。

極力、これ以上の体調悪化は避けたかった。平次と合流できるまで、今の状態では蘭を守る事は出来ない。だからせめて、こいつ時には一番頼りになる彼に、蘭を任せれる事が出来るまでは。

蘭は構わず、顔をキッと引き締めた。周りに見えないように、まずはコナンのズボンを脱がせ、止血をし直し包帯を巻いた。再度ズボンを履かせてから、彼の肩にも手を這わせた。途端に、コナンから呻きが漏れる。蘭は慌てて手を放した。

「う、ごめんね、痛かった?」

「……いや」

顔をしかめ、身じろぎながら答えたコナンを、蘭はじつと見つめた。至近距離で撃たれた事や、銃創部位も関係あるのだろうが、やはりこちらは足に負った傷よりも酷い。

蘭は口を開けながらも、再度手当てを加えてゆく。慣れた手つきで包帯を巻き終えた彼女は、そつとコナンの頭をなでた。

「ホントに、」めんね。し コナン君
「ば、ばーる

うつすら口を開けたコナンは、小声で蘭に返事をした。蘭はそれに答えるよつに、「ありがと」咳いた。

* * *

蘭は、救急セットをとりあえず先ほど買つたバッグに戻し、小さく息をついた。コナンから視線を外すと、窓から外を覗き見る。みるみる、景色は変わってゆく。新幹線に居る大半は、これから旅を楽しむのだろう。そう考へると、一人の空間だけが異質なものに思えた。

しかし。

椅子から恐る恐る顔半分乗り出して、蘭は周りを見つめた。眉を寄せ、唇をきつく結ぶ。

逃げていた途中、後ろで足音を聞いた気がした。振り返っても誰も居なかつたが、その時からずつと、視線が消えない。

横たわるコナンは気づいていないようだ。話しかけても反応が薄いほどなのだから、仕方がない。

どうこうつもりで何も仕掛けてこないのかは判らない。けれど、明らかに”誰か”的の視線が蘭やコナンを追っているのは確かだった。

蘭は、コナンを庇うように自分に抱き寄せ、小さく息を呑んだ。一瞬、コナンが薄つすらまぶたを持ち上げたが、蘭が微笑を浮かべている事に気づいて、再度瞳を閉じた。

名古屋に着くなり、蘭はコナンを抱き上げ、新幹線から駆け出した。付きまとった視線を撒こうと、彼女は必死で駅を後にした。少し前に、コナンが平次への連絡を入れていた。だから、待ち合わせるその場所に、既に待たせて居るはずだ。上手く追っ手を撒いて、彼の元に行く事が出来れば、この危機を脱する事が出来る。運動神経と体力の全てをかけて、蘭は走った。

「 どう、した？」

さすがに何かを察知したのだろう。コナンが目を開け尋ねる。伝えるべきとも思つたが、蘭は足を止めず、笑顔で「大丈夫よ」と答えた。尚納得がいかなそうに、じっと見上げてくるコナンを、蘭は抱えなおして再度微笑する。

「ら、らん……？」

「心配しなくていいから。もつすぐ服部君とも合流出来るのよ。そしたら、手当てしてもうひとつ……元気になつたらひやんと聞かせてね？ あなたの事」

あの黒尽くめの男たちは何者なのか。コナンが”ベルモット”と呼んだクリスは一体何なのか。そのベルモットに、シェリーと呼ばれていた哀の事や、その安否。更に、コナンがそれに関わる事になつた経緯と、この幼い身体の少年が、本当にずっと待つていた新一のかどうか。

彼に聞きたいことは、沢山あつた。けれど、彼の口から全てが語られるのは、病院で治療を受けてからでいい。

極力、余計な負担をかけたくないなかつた。蘭が確信して言える彼の性格は、じついう場面で無理する人だから。

「や、やくそく……ふえちまつた、な」

「うん、ホントだね」

焦點の合わない瞳を見つめ返し、蘭は柔らかく笑つた。

待ち合わせは駅からすぐの場所だつた。しかし、構わず駅を出て適當な道を走る。

平次に会つ前に、視線の主を撒く事だけが彼女の頭にあつた。

ようやく、視線をどこかに遠ざけたようで、一瞬だけ安堵して気を抜いた。

いつの間にやら、駅からは少し離れてしまつたようだ。あまり来慣れない場所で好き勝手に走り回つた事に気づいて、蘭は微かに表情をこわばらせた。

「どうしよ、迷っちゃつた？」

ただでさえ方向音痴な筈だった自分に、不安が募る。ちらり、とコナンを見るが、朦朧としている様子の彼に頼る訳にも行かず、ため息が漏れた。

仕方なく見回すと、偶然目に入つた公園に案内地図があった。蘭は胸を撫で下ろし、コナンを抱えたまま、その前まで走った。駅までの道はまあ判りづらくもないようだ。念のためにコナンを降ろしてメモを取る。しかし、完全に油断して周りへの注意を怠つた事が間違いだつたのだ。

空気を切るような音と共に、蘭の頬には熱い衝撃が走つた。果然と右頬に指を這わすと、生ぬるい液体が手に付着したのが判つた。すぐ田の前の地図には、弾丸がめり込んでいる。

「コナン君！」

振り返つた先に居た男の銃口は、まっすぐコナンに向いていた。一瞬で状況を理解した蘭は、短い悲鳴を上げてコナンを持ち上げる。先ほどまでコナンの頭があつた位置に、弾丸は正確に撃ち込まれた。抱きかかえた蘭の腕を掠めた弾は、コナンの腹部を裂いた。

「くうー！」

瞬間に苦悶の表情を浮かべた蘭だが、コナンのうめき声に、すぐ我に返つた。

きつく下唇を噛み締めると、コナンを抱えて公園の奥へ走り出す。男はそんな蘭の後を追つた。一人、二人ではないようで、足音がうるさい。

「う、うでは？」

「平気！ それよりコナン君の怪我の方がずっと……。でもどうじよ、咄嗟に公園の中に逃げちゃって、退路絶たれちゃった」

「ああ」

短い返事を聞きながら、蘭はトイレの裏側に隠れた。特に草の茂つていた場所にコナンと共にしゃがみ、微かに壁越しから公園内の様子を観察する。

暗闇が味方してくれたお陰で、彼らは少々探しあぐねているらしい。時間稼ぎにしかならないが、少しは安全だ。

「ま、まもり、通せる……自信はねー、けど。せ、せめ、て」

「ナンは腕時計のふたを開け、ゆっくり構えを取った。しかし、瞼を持ち上げて見た景色は、変わらず歪んでいる。その状況下で、構えた所で男に当たられるだけの自信はない。

それでも至近距離でなら一人ぐらいいと、コナンは唇を噛み締め、構えを取り続けた。

段々と黒服が増えしていくのを、蘭は無言で見つめていた。コナンの新しい傷を手当しながらも、コナンが助かる方法を、必死で考えていた。

緊張感に満ちた蘭の視界に、”それ”が入ってきたのはそんな時だった。

視線の先に居た男は、他と同じ闇に溶ける黒服を着て居ながらも、異質な雰囲気を放っていた。他とは比べ物にならない独特の冷たさをまとつた、殺氣混じりの雰囲気だ。

男は長身長髪で黒い帽子を深くかぶつて少し離れた位置に居る。口の右端だけを深く持ち上げたその笑みは、冷酷さを物語ついていた。

ドクン。

本能で感じ取った恐怖に、蘭の心臓は早鐘を打った。血の気が引いた顔からは、大量の冷や汗が流れ出した。足までもががくがくと震えだし、呼吸もまた荒くなる。

「ら、ん？」

「だ、だめ！」

身を乗り出しかけたコナンを、蘭は慌てて抱きかかえ、止めた。

「ぐつ」

うめき声と共に、再びコナンの身体は蘭へともたれる。

囮まれている絶体絶命の中で、四～五人ほどは居る男達から唯一逃げる方法と言えば、。

「コナンに視線を送った蘭は、苦悶する表情を目を細めて眺めた。左肩にも、右足にも、腹部にも出来た傷は、酷く痛々しい。

「私、もうやだよ」

震える声で、蘭は小さく呟いた。怪訝な表情で見上げてくるコナンのポケットから、携帯電話を奪い取る。

「ら、らん？」

戸惑う視線を浴びながらも、蘭はちらりと男たちに視線を送った。男が一步踏み出すのを視界に入れた彼女は、きゅっと唇を結ぶ。

「これしか、方法が浮かばないの。嫌よ、もう。私だけ何も知らないで、無傷で守られて、大切な人が傷だらけで弱つてくるのを見てるだけなんて」

「な、なにを」

眉を寄せるコナンを、更に深く見えづらい場所に移動させた。そして、彼女は立ち上がり、携帯電話のリダイヤルボタンを押した。

「 服部君？ うん、私。もつついでは居るんだけど、ちょっと場所変更して欲しいの。……うん、大きめの公園なんだけど、……あ、場所判った？ そうそう、そりよ。じゃあトイレの裏に来て。ありがとうございます」

電話を切った彼女は、コナンに携帯を返すと、柔らかく微笑する。

「約束、結局守れなくてごめんね。でも、私」

「な、に……考えて……っ！」

慌てた様子で伸びてくるコナンの小さな手を、軽く払う。

「らん……っ」

彼女は、一步、二歩三歩と後ずさりながら、目を見開きじっと見つめてくる「ナン」を眺めていた。別れを惜しむように、目を細めながらその姿を焼き付ける。

「私ね、ホントは、あなたがどっちでもいいの。新一もコナン君も、何より大切よ。何を犠牲にしても、守りたい事に変わりはないから」「や、やめろっ」

「今までありがとう、大好きよ。だから、ごめんね……バイバイ。

新一、コナン君

「あ……！」

必死で静止しようと伸ばされた小さな手を、蘭はただ愛おしそうに見つめた。

「ば、ばーん……っ、アイジが、く、来るまで、」

「来ても変わらないよ。いくら服部君でも、拳銃持つたあの人たちに勝てると思えないもの。の人たち、一人や二人じゃないんだし……唯一逃げられる希望を絶たれたら、どうしようも出来ないでしょ？」

諭すような口調で話す蘭に、コナンは首を振りながら必死の形相で手を伸ばす。既に六歩分離れた彼女には、届く筈はない。それでも、這つて蘭の元へ行こうとするコナンを見て、蘭は更に一步後退した。

周りの草と共に風に揺らされた髪を耳にかけ、彼女は救急セットをコナンの隣に置いた。空になつたバッグに石や摘んだ草を詰め、それを大切そうにぎゅっと抱きしめる。

バッグを決意を込めた眺めていたその顔も、コナンに向き直るなり、慈愛に満ちた笑みに変わる。

「今は怪我を治して。私、あなたの事信じてるから

それだけ早口で告げた蘭は、身体の向きを変えて走り出した。

「う、らん！」

背中に叫び声が届く。彼としては、大きく叫んだつもりであるが。

だが、それは掠れて吐息混じりだつた為、”叫び”と言つには酷く弱かつた。

必死で呼びかける声を背に、わざとコナンから少し離れた場所で男達に見つかった蘭は、腕の中にあるバッグを守るように抱きかかえ、男達と距離を置いた。

「観念して出てきたか」

その科白と共に出された銃を見て、彼女は全速力で駆け出した。必死で弾丸に当たらないよう走り抜けた彼女は、公園から出て尚も逃げた。

コナンの代わりに持つたバッグも、闇が丁度よく小さな子供に見せてくれたらしい。蘭の思惑通り、囮になつた彼女だけを、男達は追つた。

Meet'sもハ話目へ 皆様こんにちはです^v
 今回もまた、見捨てずお読みいただいている事に幸せを感じております

……前回は、予言無視してしまって申し訳ございませんでした^v
 今回に収まつてよかつた……ホントよかつた（涙）

本当は一度平次と会つてからの別れになるつもりで、でもそれだとどうしても私的に気に食わなくて。随分苦労しました^v
 だつてさ、いくら大事な人質の蘭ちゃんを殺さないだらうつて前提があるとは言えよ、いくら組織に勝ち田がなくて、状況悪化を避けるためとは言え、よ?

女の子の蘭ちゃんが囮になつてる所を黙つて見過^vして、コナン抱えて逃げる平ちゃんなんて有り得ないじゃん。

探偵としても、男としても、人間としてもありえないじゃん!

んで、更にコナンとの收拾もつかなくなるので(^_~;
 書いた部分では、当然ながら平ちゃんに喧嘩だつたコニャが居ましたが、

病院に連れてかれたりしても、旦覚ましてそこに蘭が居なくて平ちゃんが居たら、この「どうするよ?

「おめー、なんであん時!」なんてつかみかかつてつて、大喧嘩必須じゃないさ。

なので、予定変更で平ちゃんは後から来るパターンで。

てか、また傷増えるけどコニャ。。。私の趣味はこの際皆さん判つてるだろうからいとして。

絶対死ぬよあーた！！（汗）

そういうの好きで書くぐらいだから、医学知識に詳しくとも最低限の事は調べたりして知ってるつもりです。

どんだけ血を流すと死んじゃうのかとか、やばいのかとか。出血性のショック状態の事とか、どこをどう怪我してそんな処置するのかとか。

止血手段とか、応急処置とか、簡単に調べられる程度には知ってるつもりです。

なのにここまで苦しめる私。

あ、ちなみにあんまり私が書いてる事を知識として信じないで下さい。

中途半端な現実追求よりは、敢えて非常識な展開を選んでる時も多々ありますから。

例えば私、名古屋にどんな公園があるかなんて知りません（待て一応、駅の構造がどんな感じなのかとか周辺地図とかぐらいいはPで調べてました）。

モデルは、ええ。うちの近所の公園ですよ（苦笑）名古屋まで取材になんていけないし、調べて中途半端な知識で実際ある公園を書くよりは、私が何度も足を運んでる公園で書いた方が、イメージも湧きやすい、という考え方でやつてます。

ちょっと横に長めのでっかい公園でね。遊具つきの大きい広場があつて、その隣に小さい川みたいのがあって、更に隣にまた広場があつて、スポーツ施設が繋がつてて。で、その遊具つきの広場からスポーツ施設までの距離に隣接するように、森とか山とか池があります。で、トイレも数箇所あって。そんな感じの公園です。

やっぱさ、ホラ。目瞑つて頭の中に鮮明な景色が思い浮かばない

と、たほど公園の描写がなくても、書くのに不都合なんですね。それに、あの公園ならああいう探すのに苦労したりする描写もかけるしね。

バイクとか車とかが入る場所と、普通に歩いてきた人が入る場所が違うから、

この場合の蘭ちゃんが走つて行つたのは、後者ね。平次に遭遇しないようにする為に。

なので、名古屋の事なんか何も知らないです。そこ近隣の人気が読んだら、何よこれどこよ、的な意見もたれると思うへへめ・・・っ

(汗)

と、ここまで余談が随分多くなりましたけれども。

ついに別れちゃつたーへへ「ニーヤとらんりん。

ニーヤはね、もう随分前から意識保つてのも大変な状態でした事で。

無理もさせたくなかつたし、極力変な時間もかけたくなかつたのが蘭ちゃんの気持ちかな。

守りたくて、守りたくて仕方がなかつたのです。ニーヤの事も、新一の事も。どつちも大好きだから。

で、そこでらんらんが導き出しちゃつた結論が岡大作戦(へへへ；ニーヤに見立てた力バンを暗闇で誤魔化して、それを抱きしめて走るというなんともオーソドックスな。

組織に自分たちを殺す意思がない事と、自分がある程度は逃げ切れるだけの自信があるからこそ成せる技ねへへ；

んでもつて、平次の事も信用してるからこそ。ああなつたら、ニーヤの無事は全て平ちゃんに託されたわけですから。

反応ドキドキびくびくですへへ

さて、たまにやりたくないかやつや告コーナー。

次回、第九話・・・・・

「工藤……工藤！！」

公園内に響く叫びは、びっしょり濡れて倒れた彼には届かないようだ。必死で這おうとした跡だけが残されているが、蒼ざめた少年は苦しげな呼吸のみを繰り返していた。

囮となつた蘭の運命、そして大怪我を負つたコナンの運命は！新たに予想外な“あの人”登場！連れられていた謎めいた少女は何者なのか。

* * *

第九話『無力』

どうかお楽しみト下さいませ♪

今度は・・・きつと予告どおり行くんじゃないかなーなんて（苦笑）

やはりまだ未執筆部分なので、実際の科白や景色などとは少々異なる可能性もあります。あらかじめご了承下さい。

それでは、今回もお読みいただきましてありがとうございましたー

↙（本文＆無駄にながいこの後書き共々）

次話以降もまたよろしくお願ひ致します↙

・・・ああ、それにしてもこんなに感想に執筆意欲支えられてるお
話つて珍しいよ。私の趣味丸出しなお話についてきて嬉しい反応ま
でくれて、皆さまいつもありがとーデス↙↙

「う……ん！ らんっ！ らああ……ん……っ、うへー！」

余力を込めた叫びも、悔しいほどに掠れていた。手を必死でその方向に伸ばし、前進しようとするが、身体は鉛のように重い。暗闇に溶けていった彼女の足音と気配が、心を穿つ。

思い通りに動かない小さな身体を、ここまで無力に恨んだ事があるか。体力を全て使い果たしていた事に、まさか今更後悔しようとは。草むらを這つては見たものの、力の入らない腕は崩れ、地面にあごから着地した。

「く……、そっ」

手の先にあつた草を、握り締めぶちぶちと刈り取る。その全く意味のない行動に、手のひらだけが微かに痛む。彼は歯軋りをして、手中の草を投げ捨てた。

手の甲に、ぽつり、と零が零れた。雨まで降り出してきたようだ。身体はがたがたと震え、雨がしみた傷口が痛む。だが、そんな事はどうでもいい。

守れなかつた事実だけが、怪我以上にずっと彼を苦しめた。

「だ、めだ……う、らん……の、ところ、こ……」

もう一度だけ力を振り絞つて前に進もうとしたが、腕にも身体にも力は入らなかつた。それどころか、見える世界も段々と暗くなつて来ている。氣力で保っていた意識も、もう限界だ。

「……へつ」

うめき声が漏れる。せめて平次が来るまでは、とコナンは重い瞼を必死で持ち上げた。噛み切った唇からは、一筋の血が顎に流れる。そこまでも、次第に視野は狭くなり、意識は闇に飲み込まれていった。

雨が服に染み込んで体温を奪っていく。意識が消えうせるまでの間、彼はただ身体中を支配する寒さと痛みだけを感じていた。

平次は、バイクを走らせながら田を細めた。前から掛かる雨が少々つざつたい。

蘭の電話を受けた時から、嫌な予感を感じていた。だから、スピードをかなり速めた上、極力目立たないようにバイクを進めたつもりだった。

角を曲がった所で、駐輪場にバイクを残し、公園内に走った。公園は思いの外、静かなようだ。とりあえず手つ取り早くトイレの場所を探そうと、案内を覗き見る。

彼は用心深くそこへ走った。たどり着いたトイレの影から、人の居る気配を感じる。

慎重に覗きこんだ彼は、その光景にぎょっとした。

「工藤……？」

第一声に、その名前が口から零れた。口を呆然と開けて、足元から一メートル程離れた場所を、平次はじっと見つめた。

手入れされていない雑草が、不規則に汚く生えている。その中に、よく見知った少年が一人、うつ伏せに倒れていた。雨に身体を濡らされて、唇に血を滲ませながら、蒼白の顔色でぐつたりと。何もない場所に伸びた手は、ちぎれた草の上に半開きになつて置かれている。

「お、おい、工藤……！」

再度呼びかけても、少年は動かなかつた。死んでいるのかと、思つほどに。

平次の胸に、冷たい風が吹き付けるような感覚を覚えた。普段ならば即座に駆け寄つて、怒鳴るように必死で彼の名前を呼びかけただろう。が、それすらも躊躇するほど、コナンを纏う空気は、凍り付いていた。

平次は「ぐくり」と息を飲んだ。その場にしゃがんで微かに触れた彼の首筋は、驚くほど冷え切つている。そこで始めて、様々な感情が抑えようもなく胸の奥から流れ込んできた。

「お……おい、しつかりせえ！」

怒鳴り声と共に抱き上げたコナンの身体は、重力に従つてだらりと垂れた。雨に濡れ、泥に塗れた服には、血が多く滲んでいる。瞳は固く閉じられたままだ。

抱き上げながら頸動脈に触ると、拍動を感じ取れた。安堵の息をついた平次だが、腕の中に居るコナンの呼吸は酷く弱い。

「なあ、姉ちやんじなんしたんやー。おー、工藤ー！」

声を張り上げ、コナンの頬を叩きながら蘭の存在を尋ねると、コナンの眉が小さく動く。

「う……ん？」

「せやー、じーじも居りへんぞ？」

「だ、だめだ……らん」

はつあつしない発音の科白が、コナンの口から漏れる。薄っすら開いた焦点の合わない瞳に、平次は身を乗り出した。

「何があつたんやー！」

「らん……い、くな

「工藤？」

会話がまるで成立しない事に、平次は眉を寄せた。平次に抱き上げられている事はあるか、自分が何を口走っているかすら理解していない。相当混濁が進んでいるようだ。

しつかりさせなければ、と今度は強めに頬を叩き呼びかけた。しかし、再度薄く開いた瞳は、やはり相変わらず何も見えていないようだった。

「いく、な……まだ、」

その、”平次にとつては意味不明”な科白を最後に、彼は、僅かな意識すらも手放した。

「おー、工藤……工藤ー！」

必死で呼びかけて、数度叩いて刺激を試してみるが、コナンの目は閉じたまま。

蒼ざめたまま意識を失った少年の身体に、雨は容赦なく降り続けた。油断すると止まりそうなほど弱まった苦しげな吐息は、尚更切迫している容態を物語る。

「アカン。早よ病院連れてつたらんと……大阪の病院なんか間に合わへんぞ。救急車呼ぶわけにも行かへんし」

氣道をしっかりと確保しつつ、彼はコナンを抱えなおした。バイクの元へ走り、その間にも思考を巡らせる。

一刻も早い手当でが必要だが、状況から言って近すぎる病院には足を運べない。

コナンの身体の下にあつた草や土は、不自然に荒れていた。コナンの服にも泥や血液が縦に擦れついていた。伸ばされた手や、電話の内容、そして混濁しているコナンの言葉と、何故かその場に居なかつた蘭　全て重ね合わせれば、容易に想像がつく。

近場の病院なんかに行つたら、組織に待ち伏せされている可能性が高い。だが、現時点のコナンを、バイクで長時間雨に晒すような真似は出来ない。

バイクの元にたどり着いた平次は、再度腕にもたれて眠るコナンに視線を映す。

「 病院つくまで辛抱せえよ。絶対助けたる。それにお前、さつきと元気になつて姉ちゃん助けださなかんのやからな！」

意識を失っている身体を固定しようと、平次は、コナンが身につけていたサスペンダーを手に取った。バイクにまたがり、エンジンをかけながらどうするべきかと逡巡する。

突然不自然な明るさに照らされたのも丁度その頃だ。平次は驚いて目を瞑った。前に現れた車のライトだが、照らし方が狙っているようすで何ともわざとらしい。

「な、なんやねん」

視界が白一色になつたと同時に、車のブレーキ音と戸が開く音が、平次の耳に届いた。

「H e y! ほんやりしないで早くそのままを渡して…」「は？」

突然掛けられた、どこかで聞き覚えのあるような女性の声に、平次は思わず素つ頓狂な声をあげる。ライトが消えて、ようやく平次は半目を開けた。そこにあつた車の開いた戸から、金髪の女性が手を伸ばしていた。

段々と、視界が正常に戻つてゆく。はつきり見えた運転席の顔に、平次は目を丸くした。

「あ、あんた確か……」

「早くしなさい！ コナン君が死んじゃうわよ。変な痕跡は残せないから、あなたはバイクで後ろから着いてきて」

「せ、せやな」

未だ動揺を隠せずに返事をした平次だが、慌てて車の開いたドアへと向かう。

中から、金髪のショートカットが覗き込んだ。彼女は、親指で後部座席を指した。

「コナン君は後ろに乗せてくれる？ 横にした方がいいでしょ？」
「まあ、せやな のわつ！？」

彼女の言葉に頷き、後部座席を覗き込んだ平次は、奇怪な声を上げてのけぞった。

暗くて、何も音を立てなかつた為、最初は気づかなかつた。後部座席の奥にちょこんと腰掛けた、長めの黒いストレートヘアの子供が、無言で平次を見つめていたのだ。

平次の驚きも無理はない。まるで人の居る気配のしなかつたその場所に、まさか子供が座つっていたのだから。

戸惑う平次に、運転席から声が掛かった。

「詳しい説明は全て後にするわ。その子は、ちょっとやばい事件に関わつて、一時的に私達が預かってる子なのよ。大丈夫、コナン君の怪我が悪化するような事は絶対しない子よ」
「へえ、そなんか」

歳は、大体コナンの外見年齢と同じほどだろうか。切れ長の瞳と、色白の肌が暗い中でも特徴的に見える。服装は、レースのついた、年齢より少々大人っぽく見えるシックな黒いワンピース。平次を見て、口元を若干緩めるように微笑した彼女からは、クールで理知的な雰囲気がじみ出ていた。

「初めてまして、色黒のお兄さん」
「あ、ああ つて、色黒は余計や！」

少女の静かな言葉に微かに圧倒されながら、平次は苦笑し返事を返す。少女は「クス」と大人びた笑みを浮かべ、平次に両手を差し出す。

出された両手の意味を一瞬で把握した平次は、後部座席に寝かせ

るよつに、コナンを彼女の膝へ横たえさせた。

ドアを閉めてから、平次は運転席の彼女に告げた。

「ほな、ボウズをよろしくな、ジヨーディ先生」

「ええ、飛ばすからあなたもちゃんとついてきてね」

答えを聞いて走り去った車を追つて、平次のバイクもまた、その場を後にした。

車内は、静かだつた。運転するジヨーディと、後部座席でコナンの濡れた髪をハンカチで拭いながら人工呼吸を続ける少女は、お互に殆ど会話を交わさない。運転を始めてすぐにかけた車のラジオから音だけが、車内に響いていた。

少女は手際よくコナンに最善の体位をとらせ、車にあつたひざ掛けをそつとコナンにかける。眉を寄せながら、彼女はずつと必死な様子で、コナンに人工呼吸を続けていた。

” 続きまして、先ほどお伝えした東京米花町の邸宅炎上事件ですが、消火後の瓦礫跡から子供の骨が発見されたと、警視庁より追加報告がありました”

キヤスターの声を聞きながら、後部座席の少女は小さく目を細めた。ただ、それきり何も言わないまま、病院まで、彼女は必死でコナンを介抱していた。

「ナンだけがただ目を閉じたまま、まどろみの中に、浮かんでは消える蘭の姿を映していた。意識をなくした中で、ただ守れなかつた無力さのみが、彼を追い詰めていた。

“どうも”んばんはです！

今回もまたお読みいただけて幸せですvv

・・・このお話、前回投稿時にまあまあな部分まで進んでたから、
ストック溜まると思つたんだけどなvv
やつぱり忙しかったこの一週間vv；
とりあえず、明日はレス作業に勤しむつもりですvお返事お待たせ
しててすみません、コメントありがとうござりますvv

時間がない時に夜の時間使って必死に書いてた今回のお話。

まさかのジョディ先生です（笑）

- ・・・ジョディ先生の登場も、ベル姉さんの登場も、更にあのベル
姉さん登場時に組織の人たちが都合よく一人居なかつた状況も、皆
裏でちゃんとした理由を考えて敢えて出でずしてはいるのですが・・
- ・
- ・・・どこのそれを明かすべきかと言つのが段々濃い悩みになってきたわ。
伏線全部回収できるのか？ 私よvv；

・・・出来なくともやつます！ やつまじょひだりvv

で、更に新しい子の登場です

（平次が見た所では）コナンと同じぐらいの歳の黒髪少女。そして、
ラジオ・・・
やつぱり私好きだなあ、こうこう展開運び

ちなみに平ちゃんのイメージはね、私的にコナン見つけたら真っ先
に駆け寄つて、「工藤！ おい、工藤！？」みたいなぐらいのイメ

一ジなのですよ。

でも今回は敢えて駆け寄るのを躊躇させました。その方がなんとな
く、コナンの状態が伝わる気がして。

ところわけで、今回「ニヤガやっぱいです（^—^；
目開けても、周りの状況を把握出来ないとか、会話が成立しないと
かって、結構重い意識障害だよね。

・・・ハイ、白状します。全くもつて意味不明な事を口走る程に朦
朧としてる「ニヤガ描きたかったデス^_^；
それも、ニニヤ＝工藤新一を知ってる人に向かって。
たち悪い作者ね〜、ホント。でも好きなもんは好きなのさー。

蘭ちゃんは今回に入れようと思つてたけど、一話の中で場面転換や
りすぎてもしやーないかなって。
だって、今回の話つたら、

最初コナンの這つてるシーンでしょ？
次に平次のバイクシーンでしょ？

んで、車が現るシーンでしょ？

更にジヨディ先生とニニヤと少女の車内シーンでしょ。
ここに蘭ちゃんのシーンまで入れたらさすがにや。

車内シーンの部分に蘭ちゃんが入つて、次に車内シーンを回すつも
りだったけど、あのニユースはどうしても今回のお話に入れたかつ
たものですから^_^

といつわけで！ 予告編！

「あんた、何者や？」
「私？……さあ、何者に見える？」

追い詰めるように眉をひそめ睨む平次の視線を、少女は細めた瞳で、まっすぐに見上げ返した。

その口元には、薄つすらと冷笑が浮かんでいた。

ごめ、次はまだタイトル未定（苦笑）
来週までに頑張って作るつもりでーす
原動力な毎度の暖かい反応をありがとうございます！

では、次話でもどうぞお楽しみいただけますように♪

10・終結はハジマリへ

「ナンがジョディの車で運ばれて居る頃、蘭の身もまた、窮地にあつた。

暗闇の静けさの中に、彼女の荒い吐息ばかりが響く。公園からはほんの数百メートルほど離れた人気のない路地裏で、彼女は壁を背に座り込んでいた。

全速力で走ってきたため、バッグを抱える両腕は、呼吸をする度肩と運動して上下に動く。両足ともに、数箇所ある裂傷からは血液が滲んでいた。それでも、彼らが足のみを狙ってくれたのはありがたい。それだけに集中して走つてこれたのだから。

彼女は、きゅっと下唇を噛み、顔を上げて前を見据えた。一步、一步と近づく男の顔が、嫌らしく歪み、にやける。死神のよつな黒服と長い銀髪、そして冷たく鋭い視線が蘭を射抜く。

「銃弾を浴びながらここまで逃げた事は称賛に値するが、『苦労だつたな。チョックメイトだ、毛利蘭よ』」

拳銃を突きつけられ、恐怖で身体は震えた。しかし、蘭は男を睨む視線を外そとはしなかつた。精一杯のハッタリではあると判つていながらも、不敵に微笑む。

「た、確かに。ここが私の行き止まりみたい。……でも、やつとの子を逃がす事が出来たもの。本望よー」

向かい合つ男の顔色が、微かに変わる。蘭はふっと笑みを深め、抱きしめていた用済みのバッグを地面に捨てた。

「……貴様」

「私はもう逃げも隠れもないわ！ 捕まえて、どこにでも連れてきなさいよ！ 新一は、きっと助けに来てくれる。信じて待つてつて決めたんだから」

「この女ア！」

銀髪男の後ろに屈た下つ端ぽい男が、怒鳴り声を上げながら銃口を向け、引き金にかけた手に力を込めた。さすがに目を閉じて身体を硬直させた蘭だが、弾は彼女の足先にあるコンクリートに当たるだけにとどめられた。

意外にも、銀髪男に助けられたらしい。発砲した男の銃を持つ手が、彼によつて下に押さえ込まれている。

「やめておけ。本命を取り逃がしたとすれば、この女は大切な餌だ。我々を謀つた事は十分後悔させてやるつもりだがな」

男の咽喉から、ククク、と嘲笑が漏れ出た。つぐづぐ、低くて威圧的な口調には圧迫感を覚える。

「殺すべきはこの女じゃない。それよりも、失敗には死あるのみだ。人目のない場所とはいえ、電話を受けたからと、攫つたガキの一人だけを拘束して、ほいほい出かけた奴の始末がまだ済んでないようだからな」

いやらしく歯をむき出しにしたせせら笑いが、彼の口に浮かぶ。銃を持つ左手とは反対の右手で、携帯電話を取り出した男は、どこかにダイヤルをする。

電話の相手と繋がった途端、冷酷な声が彼の口から発せられた。

「そいつがやらかしたヘマのせいだ、一番の目的は狩り損ねたようだ。あの方からの許可も出てるぜ。殺れ、ベルモット」

男の口から出た”ベルモット”といつ単語に、蘭ははつとして顔を歪めた。しかし、すぐに数名の男達に取り押さえられた彼女は、遅れてやつてきた一台の車に、乱暴に突き飛ばされた。

「OK。了解よ、ジン」

鮮やかな赤い紅が、右上がりに持ち上がる。彼女はそのウェーブがかつたブロンドヘアを緩慢な仕草で耳にかけなおし、男の方を見て冷笑を浮かべた。

場所はつい先ほど蘭たちが監禁されていたのと変わらない車庫内。車に寄りかかり銃をまつすぐに向けたベルモットの、蔑む視線を浴びながら、男は蒼ざめていた。

「今すぐ、殺つていいのね？」

『ぐじいぞ、お前にも聞きたい事はあるんだがな。とりあえずそいつはさつさと殺せ』

「ええ。後でいくらでも聞かれてあげるわ」

受話器に向かつて再度確認した彼女は、返つて来た返事に、シニカルな微笑を浮かべた。

電話を切つて、腕を下ろした先のポケットにしまった彼女は、前の男に視線を戻す。

死を意識した際の恐怖に歪んだ顔はいい。その人間が持つ底の浅さと本性が垣間見える。

一步踏み出したハイヒールの音が、車庫内に響いた。男は短く叫び、ゆがめた顔から大量の冷や汗を流した。

「ま、待ってくれ！　あの時電話で俺を呼んだのはあんたじゃないか。本当なら、あんたにも責任がある。」

「呼んだ場所に中々現れないから探しに来てあげたら、もぬけの殻だった車を発見したって言つたでしょ？　まさかそんな無防備に人質を放り出しておくほど無能だとは思わなかつたわ」

「違う……そんなわけがない！　あの娘にもボウズにも、手錠と縄が解けたわけがないんだ。あんたが、逃がしたんだろう？　あ、あんた何が目的なんだ？」

壁に追い詰められ、逃げ場のない男は、それでも距離を取ろうと背伸びした。馬鹿げたあがきにクスクスと笑い声が返ってくるのを、蒼い顔で聞きながら。

「目的？　まあ、何かしら」

「ふ、ふざけるな！　俺を消して証拠隠滅しようつたって……」

男はそこで言葉を止めた。ベルモットの銃口が、まっすぐに男の心臓に押し付けられる。

彼女は笑みを崩さずに、空いている左手の人差し指を、口の前で立てた。

「A secret makes a woman woman.
…あなたとも組織の中で、上下間の付き合いはあつたし、私の秘密主義位は知ってる筈よね？ Bye bye、哀れなカラス君」

パシュ、と乾いた音が車庫中に響いた。心臓から血を流した男は、その場に倒れこみ車と地面を血で汚した。

ベルモットは拳銃から微かに浮かんだ煙に息を吹きかけ、腰元のガンホルダーに戻した。彼女は掌いっぱいほどある爆弾を腰から取り出すと、タイマーのスイッチを入れて男の隣に置いた。そしてそのまま、余裕の微笑を浮かべながら、腕組をして車庫を後にする。

ドオオン！

彼女の背後が、赤とグレーに変貌する。熱風を浴びながらも、振り向くことさえせず、彼女は自身の車に乗り込み、去って行った。そこが人気のない場所ならば、警察がかぎつけるのもそう早くはないだろ？

車を走らせながら、彼女はラジオのスイッチを入れた。

先ほど、ここに来る前にもう一軒自分が犯した爆破炎上事件のニュースが、誘拐事件と交互にひつきりなしに流れている。

彼女は目を細めながら、口端を微かに上げた。

「とりあえず、計画は順調ね。あとは、捕まってしまつたらしいエンジョルをどうするか」

呴いた彼女は小さくため息をつき、少し車のスピードを上げた。

「折角割に合わない事までして逃がしてあげたんだから、感謝しないよ？ CooI guy……」

一台の車と、一台のバイクが猛スピードでその夜間救急病院に入り込んだ。バイクから降りた平次は、急いで前の車の戸を開け、コナンをそっと抱え上げる。念のため、怪我をしていない方の肩を叩き、耳元で大きく名前を呼んで見るが、やはり反応はない。

「……とにかく先、行つてんぞ！ 一刻を争う状態みたいやからな」「ええ、お願ひね。私達もすぐ行くわ」

コナンを抱えて走る平次の後姿を、黒髪の少女はじつと見つめていた。車から降りた彼女らは、平次の後へと着いてゆく。

平次は受付に着くなり、抱えていたコナンを見せた。そして、早口言葉で怒鳴つた。

「早よ医者呼んでくれへんか？ 急患なんや！ 銃創が足と肩と腹に三箇所、撃たれてしもてから結構時間経つとつて、今はもう呼びかけても何しても全然反応せえへんねん！ ぎょうさん出血しどるみたいで」

「わ、判りました。すぐにお呼びしますので落ち着いて下さー」

受付の女性は手元の電話に、「コナンの事を告げる。間もなくしてストレッチャーと共に医師と看護婦がその場に現れ、寝かされたコナンは数名分の足音と共に運ばれて行つた。

平次と、すぐに来たジョディや黒髪の少女らは、その後を追つて走りながら、医者や看護婦にコナンの状態を説明した。

手術室へと入つていくコナンを見送りながら、ランプの点灯と同時に、三人はすぐ前の椅子に座り込んだ。

「 とりあえず後はお医者さんに任せることはないや。ジョーティ先生のお陰や。最短ルートで信用できる病院連れてきてくれたんやからな」

疲れ切った顔の平次が、ため息交じりのだれきった声で言ひと、一番手術室側に座っていたジョーティは小さく苦笑した。そして、平次を挟んで座る少女の方を覗き見る。

「お礼なら、私よりその子に言つべきよ。ずっと応急処置と人工呼吸して病院までもたせたのは彼女なんだから」

「！」この嬢ちゃんがかあ？」

平次が思わず顔をしかめて左隣を見ると、彼女は平次を見上げて、微笑を浮かべた。

「そついや、まだ名前聞いてへんかったな」「私、笠原真美よ。お兄さんの名前はもう聞いてるわ。よろしくね」

スラスラと抑揚のない口調で答えた少女は、この状況にも関わらずまるで冷静そのものようだ。ただ、平次がつい首を傾げたのはそんな理由ではない。

「なあ、あんたどうかで会った事あらへんか？」「ええ、会ったわ。さつき車の中だね」

にこにこ笑いを崩さず答えた少女を、平次の怪訝な視線が見つめた。歳相応とは違う、食えない笑いだ。平次は一瞬考え込むように手術室のライトに視線を映した後、少女を鋭い瞳で射抜いた。

「 あんた、何者や?」

つい口から出た問いに、少女は薄つすらと冷笑を返した。

「私? ……さあ、何者に見える?」

追い詰めるように眉をひそめ睨む平次の視線を、少女は細めた瞳で、まっすぐに見上げ返した。平次が犯罪者相手に向ける程の鋭い視線で少女を凝視しているというのに、彼女も臆する事すらせずその視線を受け止めていた。

10・終結はハジマツへ（後書き）

こんばんは、今回もお読みいただきましてありがとうございました！少し前にそれ夢の方を投稿しようとしたら、サーバーが込み合つて・・・と出たので、先にこちらの後書き書いてからやるつもりですが、成功するといいな。

さて、蘭ちゃんついに捕らわれちゃいました。

そして、コニヤは病院へと、少女も少しずつね

てかさ。サブタイトル決まらなくて私があれどれぐらい悩んでつけたと思う？ 考えてたの一週間ずっとだよ？

それであれって、センスないセンスない（^—^；

でも、とりあえず組織との決戦第一幕は終結したわけですし、蘭ちゃんが攫われたり、コナンが手術を受けたりと、戦いの第一幕へのスタート地点という事で。

この十話までは、いかにして脱出するか。コナンは蘭ちゃんを守れるのか。そして、後に続く伏線はりはりでした。
戦いも一幕。

怪我を負ったコナンがどう組織と戦うか、少女や平ちゃん、そしてジョディ先生。

更に、登場人物は増やしていく予定です。

平次には特にどっぷりと出番増やしてあげる予定▽
出来る限り深く、複雑に糸を絡めたい・・・▽▽

あ。一話以上にハアハアでフラフラン、強気要素も更に加わったコニヤも期待していいよー（笑）^一部の私と趣味が似通つてゐる皆様

(笑)

では、一つの段落という事で、ここまで楽しくお読みいただけた事を祈つて・・・反応なんぞあつましたらこつでもお待ちしておりますーvv

ご愛読、ありがとうございますー とこづわけで、今後ともどうぞよろしくお願い致しますv

11・離れゆく一人

少女の口元には、余裕の笑みが浮かんでいた。クールでいて、その瞳の奥には底が見えない。平次が更に眼光鋭く少女を睨むと、彼女もまた、その笑みを深くした。

そのまま数十秒ほど、一人の間だけ無言で緊迫した空気が流れるのを、ジョディは小さな溜め息をしつつ眺めていた。

「クスッ……」

唐突に少女の口から漏れた笑いに、平次は眉を寄せ、首を捻る。

「な、なんやねん」

「別に。あなたが私相手に凄く真面目な顔で警戒してるから、何だかおかしくて」

少女はそこで言葉を切ると、ゆっくりと、横髪をつづったそこに耳にかけた。

「私は、ただの子供よ。名前は笠原真美、年齢は八歳。つい数日前に両親と家族が関わった事件で、私の命も危ないからって言われてFBIに保護されているの。外国に住んでたけど、顔なじみの捜査官だったジョディを頼つて日本に来て、そしたらあなた達の事件に付き合わされたってだけよ」

スラスラと話す彼女に、やはり平次の不審は募る。少女を凝視して、視線に圧力を込めるものの、彼女は余裕の表情を崩す事はない。

「ほんで、両親は？」

「死んだわ。一人ともね」

平次の問いに、真美は間髪入れず答えた。そして、自嘲的な笑みを見せる。

「私は完全に天涯孤独つて事よ。まあ、家族とは元から疎遠でね。死んだ事も又聞きだつたから、さほど実感は湧かなかつたわ。私が歳の割に落ち着いて見えるんだとしたら、それが原因かしら？ 皮肉だけどね」

「服部君。言つておくけど、その子がしてる話、大方本当よ」

ジョディまでも真美の話を肯定したら、平次が何を言つても仕方がない。

「まあ、もうええわ。追及すんのもアホらしくなつたし」

大きく溜め息するのと同時に頭をかきむしった平次は、心底面倒くさそうに答えた。そして、腕にはめた時計に目をやり、手術室の戸へ視線を送る。眉間にしわを寄せながら、中に居るコナンの事を考えた。

「……死んだりはせえへんと思つけど」

呟いた後で、平次は苦い表情を浮かべた。

「アーッ、手術が終わつて目覚ました後が大変やうなあ。いつそ、事が終わるか完治するまで、寝とつてくれたらええんやけど」

平次がそう言つと、隣に居たジョディもまた苦笑した。

平次の頭にあるのは、コナンへの心配というよりは、自分自身へ

の心配だった。田を覚ました後の彼を思つと、苦労をさせられる事は今からでも田に見えていた。意識を失つてもうわ言でそればかり口にしていたぐらいだ。起きた後の事は、考えるだけで前途多難である。

「まあ、とりあえず死によつたら承知せえへんし、生きとつてくれればそれでええか」

再度、長くて重い溜め息が平次の口から漏れるのを、隣で座る少女は見上げ、クスリと笑つた。

＊＊＊

ジンの運転する車内には、緊迫感が漂つていた。蘭は両手両足を縛られた上、隣の男に拳銃を突きつけられている。

「フン、随分と面倒な手間をかけさせてくれたものだ」

運転席から、不機嫌な呴き声が聞こえてきた。

視線をずらして見た外の景色は、既に名古屋でも愛知でもない。外は暗いが、ところどころの標札に乗る町名は、段々と変わつているようだ。

蘭は窓から視線を外し、俯いた。哀しげに唇を噛んで、段々と口ナンから遠ざかっているだろう自分を不甲斐なくも思った。別れる手前の口ナンは、既に限界を越えて朦朧としていた筈だ。

あの後、公園や周辺を再度探しに行つたらしい彼らの仲間が「ビ」にも居やがらねえ」と言つていたから、平次とは会えた筈である。

ただ、その後病院に行けて、無事に処置してもらえたのか。手遅れではなかつたか。不安で仕方がない。

「お願いだから、無事で居て」

隣に居る男にも聞こえない程の小さな声で、蘭は切願した。

捕えられているのも忘れて、コナンの事ばかり考えてしまつ自分に、内心苦笑する。

別れるとき、自ら囚になつたという選択は、きっと最善の選択ではなかつた。必死で手を伸ばしたコナンの表情を思えば、すぐ判る。怪我よりも、彼にとつて一番苦しかつたのは何か、という答えへの問いは。

それでも、彼の命を助けたかった。生きていて欲しかつた。彼が、苦しみ、弱つていく姿は、胸が潰れるのではないかと思ひほど、哀しかつた。

蘭は小さく息を呑み、顔をあげた。未だ、状況全てが把握出来ない。

「結局コナン君は、私に何も教えてくれなかつたわ。一体あなた達は何？」

蘭の問いかけに、突きつけられていた銃が動き、ガチャリと音を立てた。

「やめる。貴様、なんくだらねえ事で、オレの愛車を血で汚そう

てのか？」

ジンの低い声に、銃をつきつけた男は途端に萎縮した。

「す、すまねえ。ジン」

「言つた筈だ。その女は大事な人質。奴をおびき寄せる餌だとな」

「お、おう」

今のは会話で蘭が理解できたのは、男がジンと呼ばれている事と、恐らく彼がこの車内にいる誰よりも権力を持つているという事だ。

「まあ、どうせ生かして帰す気はねえんだ。少しげらいなら暇つぶしに答えてやつてもいいぜ？」

そう言つと、ジンは懐から取り出したタバコを口に加え、火をつけた。紫煙が車内に充满していく。

蘭はただじつと彼を睨んだまま、生睡を飲み、決意を固めた。

「……あなた達の狙いはコナン君なんでしょう？　攫つて、どうしたいの？」

「普通なら、事情を知つたら殺すだろうがな。あれとシェリーは特別だ。ボスが心から欲している、出来損ないの名探偵を完全にする為の実験材料になるからな」

ジンは、やけにはつきりとした口調で告げた。色々と意味不明な部分が多い科白だったが、実験材料という単語に、少し不快感を感じる。顔をしかめた蘭を、バックミラー越しに見たジンが、嘲り笑つた。

「シェリー……って、一体あの子は何なの？　あなた達と同じお酒

の名前で、凄くクールで大人びてて

「あれは元々、我々の仲間だった女さ。折角姉と違つて特別待遇を与えてやつていたというのに、裏切った愚か者だがな。奴の事は、仲間の一人が射止めたさ。抵抗しなければ多少長生きできたものを、馬鹿な女だ」

低く嘲笑する声が、前から届く。蘭は顔をしかめ、俯いた。

ジンの手が、ラジオボタンへと伸びる。掛けたラジオでは、数時間前に起きたという炎上事件のニュースがひつきりなしに流れていた。

「かくまつていた愚かなじいさんも、消される予定ではあるがな」「や、やめて！ そん……きやつ！」

咄嗟に身を乗り出し叫んだ蘭は、右隣から飛んできた拳を避けられずに、頬を腫らした。彼女の右目だけが潤む。

今回は、ジンも男を咎める気はないようで、無関心に煙草を咥えた口角を持ち上げる。

「話してやつてるだけでもありがたいと思え。餌として貴様が持つ価値を考慮して、VIP待遇で接してやつているのだからな」

蘭は唇を結び、バックミラーを直接睨んだ。

今どんなに苦しくても、乗り越えればいつかきっと新一が自分を助け出してくれる。あの別れが永遠のよならではない、との時彼女は信じていたのだ。

手術中のランプが消え、横になつたままのコナンを乗せたベッドが、手術室から姿を見せた。運ばれたコナンの口には、酸素マスクがつけられている。目を閉じたままICHIと書かれた部屋に入られた。

平次達は「コナンの行く先を田で追つた後、真剣な顔で医師の話を聞いた。

医師によると。手術は成功し、弾も無事取り出されたが、まだ安心出来る状態ではなく、容態が安定するまでは、命の保証までは出来ないとの事だ。

「ですから一応、今晩集中治療室で様子を見て、容態が落ち着いた様でしたら、個室の方に移させて頂きますので」

「面会は出来るんか？」

「ICHIは特別ですので。十五分程度の入室なら可能ですが、今の時間は少し……午前十一時頃か、夕方の五時過ぎ頃とさせていただいてます。普通の個室に変わればもう少し自由になりますが」

医師は何かを言いたそうに黒田をきょろきょろ動かしている。その態度も、どことなく固い口調のも、恐らくコナンの怪我が銃によるものだからである。

平次が小さく息をつくと、ジョディは医師にFBIの手帳を見せた。ぎょっとした顔の医師に、彼女は告げた。

「FBIの、ジョディ・スターリングよ。あの子は、ちょっとヤバイ事件に巻き込まれているの。ついこの間、捜査に協力して被害者を救つてくれた病院らしいから一時的にここに連れて來たけど、犯

人に知られるわけには行かないわ。だから事件の解決まで、外でもどこでも、口外しないでくれる?」

「は、はあ。そういう事情なら仕方ないですが」

医師は多少困惑を隠せない様子で答えた。ふと、下から食い入るよつに見つめるクールな視線に気づいた医師は、目線を落とした。黒髪の少女に向けて笑顔を浮かべてみせるも、彼女の冷めた瞳に顔を引きつらせた。

変わった連中といつも見ているのは、明らかである。

「と、とにかくナースからも色々説明が行きますから。とりあえず今日の所はお引取りに……」『自宅は近くですか?』

「あー、離れてんねんけど、病院に居つたらアカンか? 狹われて

んねん、あいつ」

「しかし、ですね」

「他の患者さんにも、ドクターやナースにも、迷惑はかけないようにするわ。集中治療室への面会時間も守るから、許可してくれない?」

「?」

渋る医師に対して、平次やジョーディは強引だった。半強制的にそのままに残る許可を得て、三人の病院に一夜滞在は確定した。

医師は少々疲れた顔で、溜め息をついた。厄介な患者を受けてしまつたと思ったのだろう。うなだれた頭をかきむしりながら、彼は院内を歩いていった。

* * *

翌日、コナンは朝方早くに個室へと移動された。容態が安定したというよりは、事情が事情な為、何かあつた時個室の方が都合がよからうという計らいである。

但し、入室の際は集中治療室と変わらない細かい点に留意して、つきつきりの上何か変化があつたらすぐにナースコールをするように、との事だ。

個室に移されただけで、コナンはまだ意識のない状態だった。あまり大人数部屋に入るのは関心しないという事で、ジョディと真美は今病室の外に居る。

カーテンの外は既に明るく、雀がさえずる声が聞こえてくる。カーテン越しにキラキラと光る木の葉についた朝露が、少し日には恋しい。

ベッドで眠るその痛々しいコナンを眺めながら、平次は小さく息をついた。気分転換にでもなれば、とカーテンに手をかけ、少しだけ開けた。光が筋になつて、病室に差し込んでくる。

窓から見える病院の庭にあたる景色は、明るい緑に覆われていた。一応、不審な人物が居ないかと一周り見たが、今の所心配はいらぬようだ。

平次は安堵し、今度はカーテンを全開にした。少し眩しさも感じる朝陽が刺して、彼は目をすぼめた。と、同時に微かなうめき声が耳に届き、はつと後ろを振り向いた。

「工藤！？」
「……う」

慌ててコナンに駆け寄ると、彼は怪我をしていない方の手を顔の上に乗せた。コナンはそのままだるそうに首を曲げ、顔を窓から遠

ざけた。

「ま、ぶし……」

「あ、ああ。スマン」

平次は立ち上がり、すばやくカーテンを元に戻した。そして、ナースコールを手にした平次は、押しながらコナンと向き合つた。カーテンが閉ると、コナンはようやく手を降ろし、弱弱しく半眼を開ける。少し苦しげに呼吸を乱しながら、コナンは平次へと視線を向けた。

「は、つとり？ なんで」

まだ朦朧としているらしい。コナンは開けた瞳を揺らしながら、はつきりしない声でそう尋ねた。

11・離れゆく一人（後書き）

いつもじんにちはー 今回もお読みくださってありがとうございました
す＼

さて、前回に引き続き病院です^ ^

最初は、コニャの目覚め次話にまわすつもりでしたが、なんとなく
投稿寸前に入れたくなつて修正しました＼
さて。そんなこんなで二章突入です！

実は、今週かなーり頑張りまして、少しストック作るのに成功致し
ました＼＼うん、近々新しく、あの忘れかけてた彼らを出します。
あの面々と、あの子達と、あの人とあの人と、忘れちゃいけないあ
の人たちです（笑）

この説明で全員の顔がピーンと浮かんだ人もし居たら凄い（笑）絶
対無理っしょ。

二章は「ニーヤも平ちゃんも頑張つて動かしますよー。
そして、やつぱりコニャは手負いムードを崩さずに……でも第一章
のようになぐつたり動けないだけの子供じゃありません！ きっと＼
またわらに楽しく見ていただけたら幸いなのですが^ ^

あ、そ、うそう。先週レス遅くなつてしまつてスママセンでした。

いつも、更新日に来たのはその日中に大抵返せてるのですが、サイ
トの9-10が相当切羽詰まってて、そちらの作業で精一杯でした>
<最近、お絵かきの方がスランプで。

あ、よかつたらサイト知ってる方は見に来てやつてください
今回はちゃんと反応いただけたなら早いレス頑張るぞ！
うん、ストックが出来てる分多少余裕あると思つし。

とこつわけで、今回もありがとうございました！
または是非次話でもお楽しみいただけますようにvv

12・焦燥する名探偵

多少具体性を欠いた曖昧な問いに、平次はとうとう身体を屈めた。手にナースコールを握りながら、コナンの田線とあつた位置で囁き返す。

「あんまり喋らんでもええ。すぐお医者さんが来る筈やから」「いや……？」」「じ、じだよ」「せやから、病院やで」「びょー、いん？」

眩いしたコナンは、薄つすらしか開かない様子の瞳で室内を見回した。

意識がまだ完全に覚醒しきっていないようで、喋る言葉の発音が、それつの回つていかない印象を受ける。判りやすく言つて、”寝ぼけた口調”が妥当だらうか。

そういう感じで、医師や看護婦が部屋に駆け込んできた。平次は、処置している彼らの姿を感心しつつ眺めた。そして、ゆっくり部屋に入ってきたジョーティや少女に、苦味のある微笑で挨拶する。

医師達が去った後の室内は、少し静かだった。コナンが、何かを考え込んでいるように黙り込んでいるせいで、平次たちも上手く言葉が出せなかつたからだが。

「なあ、服部……」
「何や?」

「ナンが、呆然とした様子で呟いた言葉は、目を覚ました時よりははつきりとした発音だつた。声を聞いて、平次達は少し安堵した。身体を無理やり起こそうとしたコナンが苦悶の声を上げる。少し離れた場所に居た平次は慌てて横に立ち、ベッドに寝かせた。

「やめ！ 軽傷やないんやぞ。傷開いたらどないすんねん」「だ、大丈夫だよ。んな事より、何があつた？」

つつかえながら吐息交じりに話す姿は、少々苦しげである。ただ、主語を持たない唐突な質問に、平次は一瞬考え込み、首をかしげた。

「何が、て」

「だから。今の状況、説明してくれ……つづってんだよ。上手く飲み込めてねーんだ。何で俺が病院のベッドに寝てて、オメーがつきそつてんのか」

その言葉に、平次は眉をひそめる。

「まさか、覚えてへんのか？」

「……い、いや。撃たれて、動けないまま、蘭と、一緒にさらわれて……や、奴らと車内で色々駆け引きしてた事は覚えてるけど……あの記憶が曖昧なんだよ。胸糞悪い夢も見たし」

話すコナンは、眉を寄せた。苦虫を噛み潰したような表情を見せるコナンに、平次は再度聞き返す。

「夢？」

「ああ、蘭が……。ひ、一人で囮になる為に、奴らの前に走つてくれ夢……」

そこまで言つたコナンは、ちらりと平次を眺めた。反応を観察するように、真剣な顔で目を細めて。

「で、蘭は？」

コナンの口から漏れた問いかけに、平次は暫し逡巡せられた。必ず、近いうちにバレる事だ。言わなければならぬ事でもある。しかし、今のコナンにそれを告げる事が果たして正しいのかどうか。

「あの姉ちゃんは、その……」

「どーせ、別の病室で寝てる、とか言つオチ、だろ？ も、勿体つけずに言えよ」

「せ、せやから工藤……」

心なしかコナンの口調が早口に聞こえたのは、決して平次の錯覚などではない。

「コナン自身が一番、ただの悪夢だと思いたがつてゐるという事だ。意識が朦朧としていた中の、現実と夢の境界線が難しい中での出来事だったのだから。

言葉を詰まらせたままの平次を、コナンは不安げな瞳で見つめた。

「なあ、服部？」

「あんな、工藤。落ち着いて聞いてや。姉ちゃんは、」

「彼が駆けつけた時には、あなた一人だけがボロボロで倒れていた
そりや」

平次の言葉を遮るように、ずっと病室の隅で壁に寄りかかっていたジョディが前に出た。

今まで平次と一人きりだと信じて疑わなかつたコナンは、第三者の介入に酷く驚き、目を丸くした。更に、その後ろから見えた黒髪の少女にも、よつぎよつとした表情を向ける。

「じ、ジョディ、先生……。どうして？ それに、その子は誰？」

「この子はね、」

「い、いや。んな事より、らん……蘭がどうなつた……って…？」

コナンは自分がした質問への答えを待たずに、動搖しきつた声を上げた。顔をしかめながら半身を起こし、一番近くに居た平次の服を強く握り、引き寄せる。

「ちょ、落ち着けや」

「いいから、く、詳しく説明しろ！ 蘭がどうした、ってんだ、は

つと……ゲホッ、ゴホゴホ！」

「おい、工藤！」

興奮した状態で急に起き上がり、怒鳴つた事が身体に障つたのか、コナンは激しく咳き込んだ。軽く呼吸困難を起こしているようで、脂汗を流しながら苦しそうにむせ返る。

見かねてナースホールに手を伸ばした平次だが、コナンの手がそれを止める。

「だ、だいじょぶ……よんだら、またしばらく……話せなく、なるから」

「工藤」

とりあえず、身体をベッドに戻されたコナンは、暫く呼吸を落ち着ける事に専念した。そうしながらも、視線をジョディや平次に向け、話を聞く意思表示を見せる。

「落ち着いて、J o o l - k i d。心配な気持ちはわかるけど、動搖させて容態を悪化させる為に教えたんじゃないわ。いずれ知るなら、嘘を教えて偽りの希望を『えても何にもならない』と思つたからよ」

ジョディはそう言つた後で、隣でじっと様子を見つめていた真美の背を押した。

「順を追つて説明をさせて。まず、この子は」

「……私、笠原真美よ。よろしくね」

「か、笠原さん?」

怪訝な表情を浮かべながら聞き返したコナンに、少女は小さく頷き微笑んだ。

「……へ、へえ? ”笠原” ねえ?」

呼吸がままならないせいで、途切れ途切れになりながらも、コナンは少女をまじまじ見つめて咳いた。真美は、居心地が悪そうに顔をしかめ、視線を逸らす。

ジョディは、平次にも手伝われながら、コナンが発見された状況や少女の事、そして、ここがどこでどういう病院なのか、細かく説明した。

それを、コナンは呼吸を整えながらも、真剣な顔で聞いていた。

「とにかく、ここが見つからない場合は、彼女に危害を加えないと思うわ。だから、あなたもそれに備えて身体を治しなさい。動かせる状態になつたら、すぐに病院も、離れた場所に変えるから」

ジヨーディは有無を言わせぬ視線でコナンを見下ろした。

無言のまま聞いていたコナンは、僅かに彼女から視線を外した。乱れていた呼吸も治まり、口を一文字に結んだコナンは、伏し目がちに腕に繋がれた点滴の管を眺め続けた。

＊＊＊

ジヨーディは、コナンに針を刺してからすぐ、病室を出て仲間との連絡を取つた。病室に残された平次と真美は、押し黙つたコナンをじっと見つめていた。

「……なあ、服部。オメーならどうする？」

数分経つて、ようやくコナンは平次へと視線を送り、小さな咳きを漏らした。

なんとなく、その質問の意図が読めて、平次は苦々しい表情を浮かべる。

「な、何がや

「オメーの事件に巻き込まれて、あの彼女が巻き添え食らつて困になつて捕まつて……怪我してるからって、黙つてのんびり待つてられつか？」

「そんなん、なんとしてもすぐ助けに行くに決まつたやつ……あ、せやなくて」

「ナンの問いに、つい勢いで即答してしまった平次は頭を抱えた。慌てて訂正しようとナンを見たが、横たわるナンの顔には不敵な笑みが浮かんでいた。

「だろうな。オレも、黙つて待つてんのは性にあわねーんだ。ジョディ先生は、最後までオレを事件から遠ざけて守ろうとしてくれてるようだけ……」ればっかりはどうしても、譲るわけにはいかねーんだよ」

「待つて、あなたどうするつもりなの？」

突然口を挟んだ少女へ、ナンは視線を送った。複雑そうに眉を寄せる彼女を見て、ナンは再度不敵に笑つてみせる。今度は少し、悪戯っぽさも秘めた顔で。

「心配してくれてんだな。笠原さん」「べ、別に……どうして私が初対面のあなたを心配しなきやいけないの？」

少女は頬を赤く染め、黒髪を揺らしてそっぽを向いた。一瞬だけきょとんと目を丸くしたナンだが、すぐに表情を元に戻す。

「どっちでもいいけどよ。心配すんなって。オレだってさすがに、起き上がるようになるまでは動けねーよ。それまではジョディ先生の”かくれんぼ案”に乗るつもりさ。にしても、オレの知り合いに似て、可愛げねーな、あんた」

「う、うるさいわね……ほつといで！」

半眼で少女をからかうナンに、真美はむつとした顔で声を荒げた。

一人のやり取りに、一番納得がいかなそうな顔をしていたのが平

次だが、敢えて無駄な突っ込みはいれない。突っ込む前に、コナンが平次に強い視線を戻したからだ。

「病院抜け出してでも、蘭は必ずオレがこの手で連れ戻す。……そん時は協力してくれるよな？ 服部」

あくまで頑固な意志を変えるつもりはないらしいコナンの科白に、平次は長い溜め息をつき、うなだれた。

頭を抱えながらも、平次は力なく首を上下に振った。

「ああ、何言つても無駄みたいやからな。……オレが協力したるつて言わんと、お前一人で勝手に動きそつやし」

平次は、観念した、とばかりに諸手を挙げさせられた。
隣に立つ少女は、むすっとした様子で腕を組む。じつと彼女を眺めていたコナンは、小さく溜め息を零すと、真剣なまなざしで病院の天井を眺めた。

夕方遅く、平次と二人きりになつた頃になると、コナンは横目で彼に視線を送る。それに気づいた平次は、首を傾げた。

「どないしたん。傷痛むんか？」
「いや、大丈夫。やつと一人になれたなと思つてよ……」

待ちくたびれたかのように、長い溜め息を零すコナンを見て、平次は僅かに顔を引きつらせた。彼がこれから言わんとしている事が、聞く前に予想できてしまったのだ。

「ちょお待て、工藤はん？ どないしはる氣や？」

「……勿論、わっさと蘭を助けに行くんだよ。これから、もっと護衛が厳しくなつたら、抜け出しづらくなるだろ？ ……一刻も早く、奴らから蘭を取り返さねーと」

きつぱりとそう言ったコナンに、平次は頭を抱えた。

「お前、さりとて言うてる事違つやんけ」

「あん時は、アイツの前だつたしな」

「アイツて……」

「コナンの呑きにどこか引っかかるのを感じたが、平次はそこに突っ込むだけの余裕を持ち合わせて居なかつた。

反論しようとした平次は、苦しげに起き上がりつとしているコナンの姿に、ぎょっとした。

「ちょ、アホ！ 何してんねん」

「だ、大丈夫だつてん、だろ？ 蘭が、危険な時に……つ、大人しく寝て待つだけなんて、冗談じゃねーんだ、よー！」

「そんなん、悪化さしたら意味ないやうが！ 助けられるもんも助けられなくなるでー？」

つい怒鳴りつけた平次に、コナンはぎょと強い視線をぶつけた。

ただ、それもほんの一瞬の事だ。

眩を感じた彼は、そのまま首を仰げ反るようにして、ベッドに仰向けて倒れこんだ。弾みで身体に響いた振動に、表情が歪む。

「見てみ。ちょっと動いただけで真っ青やぞ」

ナースホールに手を伸ばした平次を、朝同様、コナンは全力で止めた。

「よ、呼ぶなっ……つってん、だら？」

「せやけどお前！」

「服部」

静かな声が、一瞬で病室内を支配した。実際、吐息混じりで弱弱しいのは確かなのだが、威圧感だけはやたらと含まれた声だ。コナンは、何度か緩慢な動作で瞬きをした後、平次を見上げた。鋭い視線に射抜かれて、平次の表情が困惑を帯びる。

「おめー、オレがどう見えてんだ？」

「どう、て」

聞き返す平次に、コナンは小さく深呼吸をしてから答える。

「だから。護られねーと、何も出来ない、弱い子供か……。や、やたら、おめーが張り合つてくる、高校生探偵、工藤新一か……どっちだ？ つてんだよ」

「そ、そんなん……」

「オレは、どんなナリしてよつと、どんな状況にあるつと、後者のつもりだけだな」

言葉を詰まらせた平次に、コナンはそれだけ告げて、不敵な笑みを零した。

「だから、今は抜け出して蘭の行方を、さ、捜すだけだよ。傷も縫つてあるし、簡単な手当でぐらい判る、からよ。し、暫くは、必要以外に動かねー、つてのは本当の、つもりだよ」

「工藤……」

なまじ、気持ちが痛いほど判つてしまつ為、平次は答えに困つた。ベッドに横たわるコナンは、強気な科白とは裏腹、ぐつたりとしている。弱弱しく半開きになつた瞳は、一定の焦点を定めず揺れていて、口からハアハアと漏れる呼吸音もまた、苦しげだ。汗を滲ませながらベッドに身体を預ける様はまさしく、絶対安静の身なのだが。

暫く考えこんだ平次は、長い溜め息をして頭をかいだ。

「オレかで、そらどっちか言われたら後者やで。工藤は工藤やろ、ガキとちぢゅうやんけ。せやけど、ちよつと前まで危篤状態やつた怪我人つちゅう事も忘れんなや。いくらお前がどんなんでも、心配するに決まつといひや。ライバルであると同時に、大親友なオレとしたらなあ」

「ば、ばーる。だれが大親友……」

小さく文句を呟いたコナンを、平次の真剣な眼差しが見下ろした。

「焦らんでも、協力はしたる。せやから一個、条件呑ふぞき」

「……あんだよ?」

面倒くせむつに尋ねたコナンに、平次は口角を持ち上げた。

12・焦燥する名探偵（後書き）

皆様、「んばんはつ！」

今回も「」覧いただけて、幸せ満タンです

今回は、もう一話全部が、ほぼ平次とコニャのターンで構成されている・・・という（笑）

手負いが好きなのと同時に、私の平次好きがありありと伝わるお話になつたんじやないかな、と。

平次が大好きです・・・♪といつか、コニャと素晴らしい形で絡んでくれる平次が大好きです！ 平次とコニャのコンビが大好きです！ やっぱり、私はコニャキャラ達の恋愛関係も好きだけど、それよりも友情の方が好きなんだなー。

ジョディとか、黒髪少女も（笑）凄く好きなのに、平次がコニャと一緒に出て来るといれだけ話独占しちゃうのね。

あ、ちなみに……、コニャが今回覚えてない云々言つ件。

記憶喪失の類ではありません、断じて（××・）ただ単に、その最悪の結果を、悪夢だと思い込みたかっただけです。

勿論、蘭ちゃんが囮になつた瞬間の記憶も、しつかりコニャの頭の中に存在してありました。

そりや、夢だと思っていたでしょう。蘭が組織に捕まつたなんて事実は。

真美さんも、しつかり馴染んでコニャとお話しておりましたねーまあ、あれだ。今回のお話で、一部の方は半信半疑だった所から、確信された事かな？

今回のお話は、私の中に居るコニャをどうぶり出したわけですが…

…いかがでしょう？（^—^；

「ニーヤはね、蘭ちゃんの為に無理するのも無茶するのも、自分の身体が傷つくのも、厭わない子だと思うよ^_^
でも、それは無考えだったり、軽率だったりするのとはちよつと違うんだ。

それでも、ニーヤはいつでも強気なのよ。

じつと誰かに任しておくなんて、そんなおとなしい子じゃないし、動ける範囲では多少無理しても動かすにいられない。だけど、普通より強いから、限界超

えても無理しちゃうし、結局無理しそうで容量オーバーで力尽きちゃう。

つまり、怪我してようが弱ってようが、とにかく強気に突っ走る行動派って所かしら。

て、突然キャラ考察しだす私（笑）

でもよ、かつこよくな？想像してみたまえよ！

苦しそうな汗を伝わせながら、ハアハア肩で息しながら……追い詰められて尚、シリアス調で不敵な笑みを作るニーヤ（くどー）▼▼▼でさ、あけるのも重そうな瞼を持ち上げて、まつすぐその相手を見ながらや、『うん』だよ。血が滲んだ傷口を押さえながらも、跪きながらも。

「バーコオ、誰が逃げるかよ……」

みたいな強気な科白を、妙に強い意志を込めた、比較的静かで掠れた、でも力の籠った低めの声で！

そんなイメージのニーヤをコンセプトに、このお話を書きたいな、とこう願望です（^_^）

てか、毎回後書きが長くなつてく罷へへ； 後書きを書く時にあけるテンションの高低差は侮れないわ……っ！
さて、次回はやっと出番なあの人たち登場！！ 是非お楽しみ下さ
いませvvv

13・心痛する仲間達

蘭をボスの手に委ねた後、ポルシエの中で、ジンはタバコを口に咥えたまま携帯電話に受け答えていた。手元の地図を眺めながら、その口には笑みが宿る。

「逃げおおせてこられるのも、今のうちだ。工藤新一よ

口から外したタバコを、地図内の一箇所に押し当てる。名古屋からは、少しだけ外れた場所にある病院だ。

「銃弾を沢山浴びて重傷を負っている状態で、そう長く持つ筈はない。奴は必ず名古屋かその付近の夜間診療が可能な病院へ運ばれた筈だからな」

狩りをするのを心底楽しんでいる様子の笑いが、咽喉の奥から漏れ出した。既に病院一つ一つをしらみ潰しに捜している。

「待つてやる趣味もないが、どうせなら楽しませもらおうじゃねえか。人質も居る事だし、田星のついた今なら、焦る必要もない事だしな」

言いながら、先ほどまで他と繋がっていた手元の携帯電話のダイヤルボタンを押す。

「ああ、オレだ。探偵事務所や宿泊施設への見張りも続ける。病院に田星をつける位簡単なのは、奴らにも十分わかつて居るだろうからな」

電話を切ったジンの助手席に座っていた、顎のしゃくれたガタイのいい男は、ジンに向けて深く笑った。

「これでもう、あのガキも袋の鼠ですぜ、兄貴」

低くて、少し特徴のある声質を隣に聞きながら、ジンもまた「フン」と小さく笑い、懐から出したシガーケースから、新しく一本煙草を咥えた。

＊＊＊

一方、東京では色々な意味で大変な事になつていた。

事件が起つた米花町とその近辺は、夜中から、朝方、昼時、ついには帰宅時間を少し過ぎた今に至るまで、変わらず騒々しい。ひつきりなしにあちらこちらを行き来するパトカーのサイレン音と、赤ランプが町を照らす。

初めてこの町に来た人が見れば、凶悪事件のはびこるような町のように錯覚し、距離を置きたくなる程の喧騒である。当然、このような事態はそうないものだが。

そして、そんなこの町で今最も騒がしいのが、ここ　毛利探偵事務所である。

ダーン！　と大きな音を立て、椅子から立ち上がった彼は両手で目の前にある机を叩いた。相当苛立ちは隠せない様子で、彼は

手にあつた「一ヒーをがぶ飲みした。

「警部殿お！　これだけ捜してまだ手がかりがないってどういう事なんスかあ！」

ズカズカと足音を響かせながら、状況を報告する恰幅のいい帽子の警部に歩み寄り、口調を荒げた。その警部　目暮十三　の両肩をすがるように掴み、前後に激しく揺さぶつてこる。

「お、落ち着きたまえ、毛利君」

「こーの状況が落ち着いてられますか！　蘭が、何者かに誘拐されたんですぞ！？　それに、あのボウズも撃たれて一緒に！　警部殿、やつぱりこにはこの名探偵が」

「どうすると言つんだね！　現場にも付近の聞き込みにも、田ぼし情報があれば我々がとっくに見つけ出している。今あるのは、黒服の男達数名にコナン君が撃たれ、蘭君もろとも攫われたという情報だけだぞ！」

力強く説得した後、目暮は強引に小五郎を自分から引き剥がした。そして、少し言ひづらそうに渋い顔を浮かべながらも、続く言葉を吐いた。

「これだけ捜して、証拠も痕跡も、手がかりも何も出ないとなると……相当手馴れたプロの仕業と言つ事だ。連絡がない所を見れば、身代金田当てでもない。どういつ事か判るだろ？、毛利君」

「くそつ！」

現実を突きつけられ、小五郎は顔を歪め、歯をきつく食いしばる。きつく握った拳を壁に打ちたて、彼はやりよつのない怒りを表現した。

「どうしゃって言つんスか……蘭もコナンも、このままじゃ、その得体の知れねー奴らの手にかかる……！」

「とにかく、今は耐えるんだ、毛利君。どの道、手がかりがなければ動きようがない。きっといずれ何か情報が入るさ。何故か、この件に関してはFBIも極秘で動いているようだしな」

「え、FBIっスか？」

諭す田暮の言葉に、小五郎は急に素つ頓狂な声を上げた。FBIが関わっているなど、彼にとつては初耳だつたのである。

聞き返した小五郎に、田暮は小さく溜め息をついた。

「我々としては気に食わんが、協力を要請されたら断るわけにもいかんしな。だがまあ、蘭君やコナン君を助ける為なら、戦力は多い方がいいだろ？」「しかし、何でFBIが……？」

「何でも、彼らが追い続けている妙な組織が、この件に関連してい る可能性が高いらしい。炎上した阿笠邸に居候していたあの哀君も、何か繋がりがあつたらしいんだが、殆ど何も教えてもらえないくてな」

小五郎の疑問に、田暮はすぐに答えた。そして、徐に天井へ視線をやつて、呟く。

「阿笠さんも氣の毒になあ。発明が殆どパアだそうじやないか。哀君の件もあるし。隣に住んでいたという青年と、子供達が励まして いるそудが……。さつき高木君が、落ち込んで大変だとぼやいていたよ」

「ああ、高木刑事も三階に居るんでしたね　　つたく、何でこんな事になつちましたんだか」

小五郎は独り言交じりの言葉を呟き、深い溜め息を吐きながら、眉間にしわを寄せた。

「頼む、無事で居てくれ……！」

悲痛な声が、事務所内に響いた。日暮はそんな彼の心を察しながらも、現時点でなんの手がかりも掴めていない事實を胸中で責めた。

＊＊＊

毛利探偵事務所の上に当たる、毛利家自宅では、住人以外の六名が湯のみを片手に座っていた。

中でも、博士の様子は、普段の彼から想像が出来ない程沈んでいて、子供達の心配そうな視線がそこに集中していた。

「ワシの家と研究と、哀君が……」

ぶつぶつと呟く様子は、昨日からまるで変化がない。

友人の学会から帰ってきた博士は、自分の家を前にして暫く呆然と立ち往生する羽目になつた。哀への土産にと買つた肉饅頭を袋ごと地面に落させ、半日前には確かにそこにあつた我が家を眺めた。火災捜査官の弓長警部と隣人に住む沖矢昂に声を掛けられ、とりあえず日暮の計らいで毛利探偵事務所へと連れて行かれた。が、そこで更に流れた骨二コースによつて、せめて無事を願つていた哀すらも失つた、と一重のショックを与えたわけだ。

ちなみに、子供達が探偵事務所にやつてきたのは、朝になつてからだ。ニコースを見て、慌てて哀やコナンと連絡を取るうとしても繋がらず、小五郎なら何か知つているだろ?と探偵事務所に足を運んだのだった。

子供達は田を見合させて、ひそひそ声で囁きあつた。

「どうしよ。博士、相当落ち込んでるよ」

「仕方ありませんよ、住んでた所がなくなっちゃつたんですから」

「オレ達でなんか力になれねーかな」

「でも、歩美も蘭お姉さんやコナン君の事凄い心配だよ……それに、

哀ちゃん……哀ちゃんがつ」

喋りながら、歩美はついに耐え切れず泣き出した。

「あ、歩美ちゃん……」

「歩美」

田暮や高木に真相を問いただしても、口を噤むばかりの為、ニユースで得た事実しか子供達には判らない。燃えた阿笠家から、子供の骨が見つかつたらしい、と言うニユースでしか。

泣き出した歩美を庇う元太や光彦も、今にも泣き出しそうな顔をしていた。光彦は浮かんでくる嫌な考えを振り切るなり、強く首を振った。

「は、灰原さんじゃないです。きっと…子供の骨としか言つてなかつたじゃないですか」

「で、でもよー。じゃあ誰なんだよ。博士の家には灰原しか居ねーんだろ」

「そ、そうですけど。でもつ、灰原さんが……灰原さんが死んだな

んて、そんなの信じられません!「

声を震わせながら、光彦は必死でそれを否定した 元太に、歩
美に、博士に、そして何よりも自分自身に向けて。

高木は少々気まずそうに子供達に視線を送った後、千葉刑事から
先ほど差し入れられた飴玉の袋を開ける。

「ほ、ほら、君達。とりあえず飴でもどうだい? もうすぐ出前取
るけど、それまでのしのぎに」

ぎこちない笑顔で子供達の前にそれを差し出した高木を、三人分
の視線が見上げた。

無言で数秒間じっと見つめられて、高木は僅かに笑顔を歪めた。
それでもその表情を崩さないよう、彼は必死で努めた。

「……ありがとう、高木刑事」

小さく呟いて、袋に手を伸ばしたのは、歩美だった。

「じ、じゃあオレも
「僕もいただきます」

目を丸くして彼女を見た元太と光彦だが、歩美に続いて手を伸ば
す。

高木は、ほつとした顔で溜め息をついた。そして、博士や昂にも
視線を向ける。

「阿笠さんと、あなたもどうです? 千葉の話だと、結構おいしい
らしいですよ、この飴」

「では、僕は一ついただきます」

昂は飴を一つ袋から取り、口にほおばつた。そして、納得した顔で二~三度頷いた。

「ええ。おいしいですよ」

「よかつた。千葉の勧めるのは当たり外れがあつて……」

後ろ頭をかきながら、ヘラヘラ笑いでそう告げた高木に、子供達の複雑そうな視線が刺した。

「でも本当においしいよ！ 博士、食べないの？」

「ええ、これは当たりみたいですよ！」

「高木刑事、次はうな重頼むぜ！」

最後に出た元太の言葉には、高木も苦笑し、隣の光彦に至つては白い眼で睨んだ。

「元太君、こんな時今まで……」

「い、いいじやねーかよ。どんな時でも腹は減るんだからよ

口々に詫つ子供達を呆然と見つめていた博士は、ふと笑みを浮かべた。

「そりじゃな、ワシもそろそろ腹ペコじや。一つもりおつかのう…

飴を取つて幸せそりこぼおばる博士の姿を見た子供達は、ほつとした様子で顔を見合せた。

落ち込んでいた空気が、少しだけ変化した。子供達は、高木に渡された袋の裏を見ながら身を寄せ合つた。

「えっとね、歩美のはいちご味だよ」

「僕のは、みかん味ですよ！」

「オレは、えーと……パインに、メロンに……、ももに……」

「ちょ、元太君。いつの間に何個ほおばつてるんですか！」

ふと元太の顔を見た光彦は、すかさずツツコミをいた。ゴロゴロと口の中では音を立てる元太の類が、限界までじんぐりと詰め込んだリスのようになっていたからだ。

「い、いいじゃねーかよ。こんなにあるんだから」

「でも、そんないつぺんに食べておいしいの？」

「うめーつて。トロピカルフルーツ味だぜ、これ！」

「ええー？」

歩美と光彦二人分の白い視線を浴びながら、元太はまた一つ、飴をほおばつた。

先ほどまでの雰囲気はどこへやら。切り替えた早さに驚くほど、子供達は楽しく雑談を交わしていた。いや、それは何より、コナンや哀の無事を、必死で信じているからであろう。

そんな様子に、眺めていた高木からも、小さな安堵の溜め息が漏れた。

先ほど自分も袋から取り出していた飴を、口元へと運んだ。ふと、ま後ろに視線を覚えて、振り向く。

「いい子達よね、高木君

「さ、佐藤さん！」

腕組をしてそこに立っていた彼女に、思わず声が上がる。

「そっ、捜査は？」

「その経過報告しに戻つてきたら、警部がこっちの様子見に行つてみなさいって。結構心配してたわよ？でも、上手くやつてるみたいで安心したわ」

偉いわね、と褒められ、高木は微かに頬を染めた。照れ隠しに後頭部をさすりながら、彼は答える。

「いえ。首を元気付けようと思つて、千葉においしいおやつ頼んだんですけど……子供達に逆に氣を使われちゃつたみたいで」

「いいのよ、高木君の気持ちが伝わったから、少し和やかになれたんでしょ？あなたは十分良い事したわ」

「ハハ、ありがとうございます、佐藤さん」

礼を言つた高木に、美和子は微笑を返した。そして、ポケットに入れていた携帯電話が震えたのに気づき、着信ボタンを押す。

「……はい？」

電話を耳に当てるなり、美和子の表情は一転して真剣さを帯びた。首を捻る高木に田もくれず、懐から警察手帳を取り出した彼女は、そこに手早く何かを書き記したのである。

「高木君、やつと一つ進展したわ」

呆けた眼でその様子を眺めていた高木に、美和子は不敵な笑みを見せた。

* * *

病室内には、沈黙の雰囲気が漂っていた。未だそこには、ベッドの横に立つ平次とコナンの二人きりだ。平次はじつと真剣なまなざしでコナンを見つめ、コナンは眉間に皺を寄せながら、虚ろな眼を彼に向いている。

沈黙は、つい数分前に平次が条件と称して発した一言からだつた。渋い顔を浮かべるコナンに、有無を言わせぬ厳しい視線があたる。平次は、念を押すように低い声で再度言つた。

「ええな？ 工藤」「…………わーったよ」

重い溜め息がコナンの口から漏れるのを、平次はただじつと見下ろした。しかし、視線の先に居るコナンは、段々と瞬きが多くなっているようだ。持ち上げる瞼も、やたらと重そうに感じじる。

「工藤？」
「な……情けねー、よな。おめーにたよらねーと…………こいつから、うごけ、ねー…………なん……」
「く、工藤！？」

コナンが呟いた言葉の最後は、まるで単語という形をなしていかつた。平次は慌てて、コナンのすぐ目の前までしゃがみこんだ。目を瞑つたままのコナンは、相変わらずの浅い呼吸を繰り返している。

少し心配になつたが、疲労に耐え切れず、寝てしまつただけのようだ。

意識を取り戻したばかりの怪我人なのだ。体力が落ちているのも無理はない。

「 ちゃんと我慢せえよ。お前の為やぞ、工藤」

囁いた平次は、小さく息をつくと共に、椅子に座りなおした。

13・心痛する仲間達（後書き）

ところが、皆様こんばんはー、こんにちはーと云つて、お早う御座いますの方は……（べどーー）

第十二話、今回もじ覽頂きました。どうぞ、お見せください。

今回は米花町の人々メインでお話を進めさせていただきました。やつとのじ登場です。おつちやんや警部、それに高木刑事や美和ちゃん。勿論博士や探偵団も。

このメンバーは、「ナン本編の中でも登場回数の多いメインキャラクター」で、出す氣満々でした。

暗い博士と言うのが何とも書きづらかった……（へへ；でもさ、あの状態で「大丈夫じゃよ」とか言わせて、逆にイタイじゃん；；発明品や家の事だけなら、博士はきっとちゅうぶり残念そうに笑いながら「また作り直せばいいんじゃよ」とか言つと思うけど、哀ちゃんの事はそうは行かないよ。やっぱり相当ショック受けるはずよね。

まさかの沖矢さんも登場です

彼は、原作でも謎だらけだから使うのかなり躊躇してたのですが（へへ；；

彼が、私の大好きな人である可能性も、別人である可能性も存在するわけで。

逆に哀ちゃんの考えがあたつている可能性も確かに存在するわけで。私は、あの人であつてくれたらいいなーって目で見てますけど。あの人と噂だけで放置される人の人が同一人物の可能性もなくはない・・・全くの第三者という可能性も捨てきれない・・・（てか、私と同じ事考えてなきや意味判らない後書きだなコレへへ；）

まあ、今回は私の考察以前に、話の展開としてよりいい方を採用さ

せていただぐのでvv

でもvvて、おつちやん。

私は、おつちやんがコニャや新一を心配してるような状態が凄く大好きです！普段あだからこそ。

摩天楼の病院シーンや、奇術愛好家連盟の時なさりげない気遣いや、命がけの復活で目を覚ましたコナンとのほんの些細な会話や。ち・な・み・に。ネタバレになるので詳しくは語れませんが、S神様シリーズのおつちやんの態度は終始私を興奮させて下さいましたvやつぱり、本当に根っこから嫌うわけはないよねvv心の底では認めてて、でもそれを認めたくないだけだよねvv

ところわけで、どうしてもコニャも心配して欲しかったんです。でも、蘭ちゃんが攫われてる状況では、おつちやん中々コニャの事考えてくれなくて困っちゃった私(^ ^ ; 科白覚えてる時は、頭ん中で喋ってるキャラを大切にするんだけど・

「蘭が何者かに攫われたんですね！ 落ち着いてられますか！」

とか・・・、
「無事で居てくれ、蘭！」

とか、
「蘭が」(・・・)ンドレス。
とかへへ；

蘭ちゃんの事ばっかり考えてました。私の頭ん中のおつちやんは。でも、コニャの事もちょっとは考えて欲しくて、あんな風にしたのですけどねvv

警部へのおつちやんの口調vvて、ちょっとぴり難しいvv

中途半端な敬語使うよね。結構、声に抑揚が大きいから、静かな文

章でその雰囲気出すの結構難しかった＾＾；

違和感なく読んでいただけたならいいのですが・・・（^—^；

さて、また新キャラが登場予定の次話！ その人も口調の使い分け
があつて難しい・・・（^_^；

その点、平次は関西弁って事除いたらあんな扱いやすい人居ないよ。
誰にでも同じ口調だもん。

あと、口調で言うと……蘭ちゃん辺り苦手だな。 あんまり話し方に
特徴らしい特徴がなくて。

Meetssの特殊な設定に限つて、車内で蘭ちゃんと会話する「
ニヤの口調も難しかつた。蘭にバレてる事を判つても、完全に新
一らしく話すわけにもいかず、でも怪我で朦朧としてちょっと混乱
してるっぽい感じな、子供演技中の「ニヤ」と新一を混ぜたよつた口
調が^_^；

ああ、何か今回も沢山語っちゃいました^_^；
レスが少し遅くなつててスミマセン。とりえず、寝る前に頑張る
つもりです^_^

次回もまた、お楽しみいただけたら嬉しいですー^-^是 非 よ ひ じく
お願 い 致 し ま す ね^-^

感想なども、よろしければいつでもお待ちしておりますー^-^

手術から一日半ほど経つが、体調は未だに思わしくない。

朝の雀が鳴く声もまどろみの中で聞いたコナンは、今まだ微かに乱れた寝息を立てている。

ベッド隣にある小さな棚の上に置かれた時計は、一時を指していた。深夜ではなく、昼の一時だ。

コナンの隣に腰掛けた平次は、ただじっと彼の様子を眺めていた。先程、病院の食堂で食べたミートソースの味が僅かに口に残っているのを楽しみ、時折けらりと時計を見やりながら。

「こくらなんでも、そろそろ起きてええんやないか？」

小さく溜め息を零したくなる彼の気持ちも、至極当然の事だ。

タベは、一時頃までコナンに付き添った。そして、今朝早くからまた病室でつきつきだ。

一人ひとり交互につきつきの護衛を、とは言つたものだ。ジョディは目立つといけないという理由で、仲間は誰一人呼んでいない。その割に殆どの時間、病院から出てどこかに電話しているようだ。ちなみに、真美も時折病室に来てくれるが、護衛などの役に立つ筈がない。自ずと、平次が一番付き添う形になるのである。

「ベビー、せめて早よ田え覚ませ。退屈で死にやつや」

だれた声を出しても見るものの、具合が悪くて寝てている状態の彼を、無理に起こすわけにもいかない。せめて、溜め息と独り言が精一杯だ。

「昨日無茶な事するからやで。何が動けるようになるまでじつとしとる、や。散々もう大丈夫やて騒ぎよつてから」「アラ

その後これだけ寝込んでしまつようなら、まるで”大丈夫”とは程遠い。

眩いた平次は、廊下に足音を感じて振り向いた。ドアが開くと同時に、金髪ショートヘアが顔を覗かせた。

「ハーサイ、具合はどう? cool kid!」

部屋に、無駄に明るくて大きな声が響いた。同時に、コナンがだるそうに目を開く。目を覚ますなり、彼は首だけ捻つて、時計を一瞥した。

「……え、もう昼?」

「せや。いつまで寝とんねん、アホ」

頭をはたかれて、コナンはムツと平次を睨んだ。ジヨーディは、コナンの前で一枚の地図を広げる。

「あなたの移転先の病院が決まったわ。いつまでもここに居るわけにも行かないし、早く移動しましょ」

「……早かったね、病院決めるの」

「ええ、日本警察に感謝して。ただ、警視庁の手が届くところに置きたいらしくて、結局杯戸町の病院になっちゃつたけど。……一応警察病院だし、あっちも私達も責任もつて護れるわ」

ジヨーディはそつと微笑んだ。コナンは多少浮かない顔をしながらも、頷く。

「出来れば、皆を巻き込むような展開は嫌だつたんだけど」

「まあ、しゃーないやんけ。もしかしたら、もう既にこの病院かぎつけられるとかも知れへんし。早よ対策たてなあかんやろ」

「オレとしては、嗅ぎ付けられてたら嗅ぎ付けられてたで……」

乗り気ではないコナンを諭そつと必死な平次に、コナンはぼそりと呟いた。平次の耳にはしつかり届き、太い眉が歪に動いた。タベの始終を頭に浮かべると、この無茶ばかりな少年に、嫌味の一つも言いたくなるものだ。

「手伝おてもらわな身体も起こせへん重傷患者がよー言いわ」

「あ？ オメー、さつきから随分つつかかつてくるじゃねーか」

「当たり前や。オレが昨日どれだけ苦労させられたと思てんねん！」

「そんなの……っ！ う、あぐっ」

「お、おい、工藤！」

声をあげた瞬間、呻いて肩の傷を抑えたコナンに、平次は慌てて身を乗り出した。傍で見ていたジヨーディもまた、同じようなリアクションをする。

大声を出すと相当傷に響くようで、食いしばった歯の間から、苦しげな吐息が漏れる。額に滲む脂汗は、それを如実に物語つている。昨日もそうだが、そんな状態だと「うのに、医者を呼ばう」とすると必死で止めるのだから性質も悪い。

ジヨーディは苦しむコナンを眺め、溜め息を一つ零した。

「コナン君、昨日言った通り、居ても立つても居られない気持ちは判るわ。でも、今は彼らから逃げる事だけを考えて。大丈夫？」

「う、うん……判つて、るよ」

「さ。仲間を待たせてあるわ。長距離を移動するから、容態が悪化した時の事も考えて、優秀な医者と最低限の設備は整えてあるから

……今苦しいなら落ち着くまで待つけど

「へーきだよ」

笑顔のジョーディが、入つてと言わんばかりにチャックを開けて突き出した大型のショルダーバッグを見て、コナンは顔をしかめた。

「大丈夫、車の中までよ。まだ立つて歩ける状態でもないし、ベッドで移動したり、おんぶやだっこで移動するのは幾らなんでも困立つでしょ？」

「まあ、……そうだね」

心底嫌そうに返事をしたコナンは、傷口を押さえながらも、ゆっくりと身体を起こした。完全に起き上がる前に、ジョーディの両腕に支え上げられる。

バッグに入れられて、多少苦しげなコナンを、真美は覗き込むよう見下ろした。

「じつとしていてね、あなたは病院まで荷物になりきつて。私が……」

眩きながらも、真美は少年用の帽子を手にして、それを被つた。結い上げた長い髪を帽子に隠し、前髪を少し崩す。ラフな男の子用のTシャツと半ズボンを着こなした彼女は、足に包帯を巻いた。そして、眉間に皺を寄せるコナンを見て、ふわりと微笑した。

「私が、あなたのフリをするから。彼らがどこで見てるか判つたものじゃないし、この位の囮は立てないとね。仕方ないから協力してあげるわ」

「ばーる、やめとけよ……！ キ、きけんだぞ？」

「生憎、子供の身代わりなんてそう簡単に用意できないのよ。や、

そんなバッグの中で興奮したら、身体にも響くわ。安心してさつと運ばれなさい」

「いやつ……けど」

止めようとしたコナンにも、彼女はさりとと言い放った。コナンが入ったバッグは平次に持たせ、真美はジョディの腕に抱かれた。ジョディは外にある車を確認し、平次に言った。

「服部君は、呼んでおいた佐藤刑事の車に乗り込んで。私達は別ルートで行くわ」

平次は納得がいかない顔で、ジョディに抱かれた真美を見つめる。

「ホンマにええんか？ こいつの言ひ通り、ヤバインやで？」

「ええ、上手くやるから大丈夫よ。杯戸町の警察病院でまた会いましょう」

真美は、余裕を感じさせる笑みを浮かべた。それを見ながら、平次はコナンが入ったバッグを慎重に持ち上げる。チャックを開けたままコナンの様子を確認した。

「……苦しないか？」

「あ、ああ。服部、忘れてねーよな？ 昨日の話」

「……オレが出した条件やしな？」

溜め息交じりにそつ答へつつも、平次はカバンのチャックに手を当てた。

「ちゅうどだけ我慢せえよ、車着くまでの辛抱や」

気遣わしげな言葉に、コナンは小さく頷く。息をしやすいようにと、チャックは十センチ程開けたままにされた。少し急ぎ田の歩調で歩いた平次は、病院を出てすぐの駐車場に止められていた車に乗り込んだ。

「スマン、結構待たせてしまたか？」

「ううん。お疲れさん。バッグを後ろに乗せて、あなたは助手席に乗つて。行くわよ」

車が動き出すのを感じながら、後部座席にバッグを預ける。受け取つたのは、どこかで見覚えのあるような顔だつた。平次が首を捻ると、彼は僅かに苦笑してみせる。

「初めまして。僕は新出智明つていいます。ホラ、文化祭の時に一度だけ顔を見た事あるんじやないかなつて、聞いてますよ」

「あー、せや。居つたなあ、アンタみたいな奴。ホンマはあん時別人やつたそいやないか……けどアンタ腕は大丈夫なんやろな？」

「大丈夫ですよ、外科も内科も経験は短くないから。事情も少しは知つてますし、頼むつて言われましてね。東京までの間は僕に任せ下下さい」

そう言つた彼は、バッグの中からコナンを解放して、自分の膝枕に乗せた。

「……え、新出先生？」

「コナン君も結構久しぶりだね。それにしても、こんな大怪我するなんて。いつも事件に関わつてばかりで、本当に無茶しすぎだよ、君は」

溜め息交じりにそうぼやいた彼は、コナンの手首に触れて脈を取

りながら、手際のよい処置を始めた。

手当てをされているコナンの顔に、苦笑いが浮かぶ。

「……でも、佐藤刑事までビリして」

小さく呟いたコナンの声は、しつかり彼女に届いたらしい。少し言葉を捜すような返事の後で、彼女は後ろを振り向くことなく答えた。

「ジョディ先生に呼ばれたのよ、目暮警部が。日本では私達の方が動きやすいし、信用が置けてドライブ技術がいい刑事を名古屋の病院まで寄こしてってね。で、警部が私を推薦したってワケ」

「つちゅー事は、ドライブテクには自信あるんやな」

「ええ、任せて。あんまりコナン君車内に閉じ込めてられないし、今は一時過ぎた所ね。薄暗くなる前には病院に運んであげるわよー」

彼女の表情はまさしく、エンジン全開モードである。

その科白を聞きながらぼんやり窓の外に目を移した平次は、看板の標識に書かれた地名を見た所で、表情を固めた。

標識によると、まだここは『名古屋の外れ』だ。

「ちょ、ちょー待て！ 薄暗くなる前に……無茶な運転は逆におわっ！」

車がすき出したのを計らつたよ、美和子の車は急にスピードを上げた。一瞬顔をしかめつつ、驚嘆の声を上げた平次だが、さほど衝撃はなかつた。スピードは上がつても、乱暴な運転とはまた違うらしい。

「そりゃ、容疑者追つてわけじゃないんだから。怪我人の居る車できわどい走り方なんかしないわよ」

美和子は苦い顔で笑いながらも、言った。

奇妙な組み合わせにも関わらず、車内のムードは比較的穏やかだつた。ただ、その車だけは快適にスピードをあげ、傍を走る運転手達の目を釘付けにしていた。

数十分ほど走った頃だ。ふと、平次は車のサイドミラーに視線を移した。少しだけ車間の空いた位置に走る一台の黒い外車が見える。そう言えば、病院でも同じ車を見た気がする。美和子が飛ばしているにも関わらず、それは先ほどから消えては現れて後ろについてきていた。車内は、黒く加工された窓のせいで、まるで中を覗けないのだが。

「 なあ、あの車おかしいか？」

平次は眉間に皺を作りながら、組んでいた手を空いた窓に載せ、頬杖する姿勢をとつた。

「 どうした？」

真っ先に平次の言葉に反応したのは、眠そうに横たわっていたコナンだ。首を倒しながら助手席側を見て、弱った声で尋ねる。

美和子もちらりとミラーを一瞥し、口元に不敵な笑みを浮かべた。

「 つけられてるって言いたいのね？」

「 せや。明らかにおかしいやろ、病院からはずつとやで？」

平次の言葉に、美和子は深呼吸をするほんの三秒程度思案した。

「コナン君、ちょっとの間だけ我慢してくれる?」

「ちょー待て。どないする気や?」

「撒くな。今の段階ではそれしかないでしょ……運転荒くなるけど、平氣そつ。」

運転席から半身乗り出した美和子が、ドア越しに後部座席を見て、自信ありげに笑いかける。コナンはそんな美和子を眺めながら、浅く頷いた。

「いいよ。僕今こんだから、状況もよく判らないし。車は佐藤刑事に……まかせ、るよ」

その言葉を言い終えるか否か、コナンは再度瞼を落とした。新出は渋い顔をしつつも「出来るだけ気をつけて下さいよ」と念を押す。しつかり前方を見据えた美和子は、再びきつとした余裕ある笑みを浮かべた。

「OK、コナン君の事、しつかり守つてて頂戴ね」

彼女の科白と共に、比較的空いたその道を、一台の車が飛び出した。

凄まじいスピードで、その辺にある車達を牛蒡抜きしていく。車内では、ぎょっと目を見開いた平次や新出らが、必死で体制を整えていた。

14・おひるの脱離（後書き）

えー、こんばんは♪ ストック溜めてよかつたーと実感した今週です^ ^ ;

コナン系のイベント仄くしな十月頭は、なんとまあ忙しい^ ^ ;まあ、よかつたら記念日サイトさん覗いてやつて下さい♪頑張つて描き描きしたので。

と書つ訳で、今回はまあ脱走計画（笑）についてはちょっとびり後のお楽しみといつ事で。

内容上、色々調べる所が多かつたのですが。調べても今一よく判つてません^ ^ ;

一番口調で苦労した新出先生。彼は帝丹生徒に敬語で話すけど、コナン相手には普通にタメ口きてたじやん？ 生徒相手にした敬語も、稀に「だよ」とか混じってたような気がしたりして。凄い難しいキャラでした彼は。

で、そんな彼ですが、専門科は？ やつぱり、学校で検診とかやつたりするなら内科だよね？

コナンは、術後すぐなわけで、それが急変した場合なケアは内科医で平気なの・・・？ という話。実際手術するんでなくとも、手術が絡むなら外科の担当なんじゃないのかなと思つてみたり。

彼は色んな意味で適任なので（一度組織やジョーディと関わった事があつたり）今回どうしても彼に出て欲しかったのですが、最初平次の科白がね。

「アンタ外科医やつたんか？」で「内科で働いてるけど、一応外科でも成績は悪くなかったよ」的なやり取りをさせたわけで。

そうなると、内科医はこのケースで不適合で事になるじゃない？

でも、「アレ？ 本当にそうなのかな？」と思つて。

私、外科と内科の明確な違いが実は判つていなくて。調べてみて「メスを握るか握らないか・・・手術をするか、診察したりするか？

そりやそうだ」とか呟いちゃつたり（笑）

でも、同じ病気のケースでも、内科医と外科医が両方診るパターンもあるわけでしょ？ 内科で診断して外科へとか。内科医だって、薬出すだけじゃなくて外来とかでも具合悪い処置は普通に出来るわけじやん？

で、調べる」とに判らなくなってきたので、平次と新出先生のやりとりがあんな曖昧なものに変更されましたへへ；

・・・あ、まるで関係ないけど「～じやん」って横浜弁らしいですね。最近知りました。「じやん？」は「じゃない？」だと思つていただいて。

で、名古屋から東京までの時間。新幹線とかじゃなくて、車で。やつぱり、道が空いてても、少なくとも三時間そこそこは掛かるよね？

これも調べたの。地図だと、範囲が広すぎて所要時間とか出てきてくれなかつたから、検索したら東京～名古屋間を車で往復した人のブログがヒットして（笑）

でも、結構休憩取つたりもしてるような事言つてたから、結局正確な時間は不明で。

美和子はガソリンが切れない限り休憩するつもりなさそうだし、果たして「一時に名古屋に居て、薄暗くなる前に病院へ」という美和子の言い分が無茶なのかどうか。

私本当そういうの苦手なの(^ _ ^)

土地勘もないし方向音痴だし、車も父のに乗つた事しかないし。学生の頃は、地理（特に国内）の成績は結構悪かつたし 中学で社会

科が地理だった時、2とつちまつたのよ！

元から社会は興味がなくて点数も平均そこそこだったとはいえ、主要五科目はテストで大体の点稼げる分比較的得意だつたんだけど。人生の汚点です。ありえねえ・・・（笑）

数学つて言うか算数は、とことん距離とか時間とか速さとかの問題が苦手だつたし。

でも、きっと薄暗くなる前（4～5時ぐらい？）という美和ちゃんの意見は結構無茶だ！ という判断に達しまして、ああなりました（笑）

そんなこんなでかなり必死だつた今回。違和感なく読めてもらえるといいなあと内心ドキドキ（^_^； 今回もお楽しみいただけましたでしょうか？

長く付き合つてくれた方にはりがとうを込めて。久々予告してみようか。

次回予告＊＊＊

蘭はその研究室へと足を踏み入れた。組織のボスと言ひ、彼に連れられるがままに起動されたパソコンに映し出された複雑な場面……それは。

「アポトキシン4869……出来損ないの名探偵。彼を子供にした薬だよ。気になるかな？」

彼の言葉に、蘭は息を呑んだ。

そして、車内の「ナン」を襲つ異変。彼らの運命やこかに。

第十五話、『A P T X 4 8 6 9』 びつれ、お楽しみトモコまセバ

……できれば今日中にそれ夢頑張りたいなあ。

P.S. 後書きが妙な改行を何箇所か見つけたので修正しました。それ以前に読まれた方申し訳ございませんでした！だから、投稿前にメモ帳で用意しどくの嫌なんだ／＼ちゃんと改行したのに。

車に乗っていた男達は、前方に居た標的が突然前に飛び出した事に、一瞬ぎょっとした。運転席の男は、慌ててアクセルを踏む足に入力を入れ ようとして、助手席の男に止められた。

運転席側の男は、不満げに隣を睨んだ。

「なんなんですかあー、早く追わないと！」

「まあ、待ちたまえ。あの車は警視庁の腕がいい婦警が運転している筈だ。深追いは不味い」

「けどーっ、」

「それに、ジンからも連絡が入っているのさ。無理はするとな。行き先の見当はついてるらしく……じっくり狩りを楽しむつもりだな、アレは」

助手席の男は、そう言つて口元に小さな嘲笑を浮かべた。隣で、未だ納得がいかない顔の男が、渋々押し黙る。助手席に座る男とは、組織の中で身分が違いますのだ。

「そんな不満たっぷりの顔はするな。記念すべき組織の一員としての初仕事に、こんな大役掴ませてやつたのだからな……ナンバーも細工してあるし、足はつかないさ」

「判りましたよー。じゃあ、次の岐路で引き返しますか」

「ああ。そうしり」

あつさりそつと答えられて、運転席からは溜め息が零れた。未だ少々納得がいかないようで、小さな呟きが暫く彼の口中で囁かれていたが、やがてそれも聞こえなくなつた。

彼女が連れてこられた場所　そこは、どこか廃れた研究所の一室のようだつた。

案内されるがまま、歩く足が震えた。それは、数歩先を歩くその人があまりにも静か過ぎる雰囲気を醸していただせいだ。何を考えているのか、これからどうなるのかまるで見当もつかない。

暗い場所で会つて、暗い場所を歩いてきた。だから顔は全てはつきりと見えないが、後ろから恐る恐る覗き見た口元は、穏やかな笑みを浮かべているようだ。

もしかしたら、この男一人ぐらいなら、空手で何とか出来るのではと考えも浮かんだ。が、その後姿には、まるで隙がなさすぎた。

どこかと電話をしているらしいその人は、たまに「ジン」という名を口にした。恐らく、自分を攫つたあの銀髪で威圧感のある彼が電話相手であるう事は、蘭にも判る。話の内容は、よく聞き取れないのだが。

「そうか、杯戸町にある警察病院へね。……ああ、構わんよ。誰よりも信頼している君に、全てを一任するつもりだよ」

電話の締めくくりだけはっきりと耳に届いたのは、まぐれか、はたまたわざとか。電話を切つたその人が、それをポケットに納めるのを確認して、蘭は小さく息を呑んだ。

「あ、あの……」

思い切って声を掛けたものの、動悸が激しくなって、次に言ひついでき事が中々口に出せなかつた。しかし、彼は歩を止め、緩やかな微笑を口元に浮かべた。

「何だい？ 私に質問があるなら、遠慮せず聞くといいよ」

一応、まともに聞いてくれるつもりはあるようだ、その声には紳士的な印象すらも持つた。蘭はとりあえず一息ついて動悸を抑え込み、まっすぐに前を見やつた。

「あなたは、私やコナン君を攫つた人達の、ボスなんですね？」

「……ああ、そうかもしねないね」

「は、杯戸町の警察病院には、何が？」

色々と聞きたいことが頭を巡つたが、とりあえずそれが蘭にとつて最も気になつた単語だつた。向き合つ彼はふと静かに笑みを深め、囁くように答える。

「そこにはね、最も手に入れたい坊やが向かつているんだよ。まだ、自分の身に降りかからんとしている災いに気づいてもいない、可愛いい坊やがね」

「そ、それって……まさか！」

「ああ、君にとつても大切な存在だつたかな？ 工藤新一君の事だよ。……それに、私の憶測に過ぎないが、多分もう一人」

どこか高圧的だが、やはりその口調はまだ穏やかだつた。

蘭の心境は複雑だつた。コナンがとりあえず無事であるらしい情報と、何故かその所在が知られているという事実に。

瞳を揺らす蘭の表情が見えていたのか、彼は一瞬後ろを振り向く

と、また意味深に笑つた。自然な仕草で、彼の手元にあつた古びたパソコンの電源を入れる。

起動されたパソコンの画面には、唯一つ” A P T X ”と書かれたフォルダが置かれていた。彼は立つたまま、マウスでそれをダブルクリックしてみせる。同時に、夥しい化学式や図形の羅列が、画面に浮かび出た。

呆然と口を開けたままそれを見つめる蘭に、彼はまた囁くよつて告げた。

「アポートキシン 4869……出来損ないの名探偵。彼を子供にした薬だよ。気になるかな？」

「え？」

「……餌にされてしまつ哀れな君に、ささやかなプレゼントだよ。ジンも言つたと思つが、君への待遇はVIPのつもりだからね」

そう言つた後、彼は一度言葉を区切つた。そして、今度はより低く重い声で、再度囁きを零した。

「彼自身も気づいていない、近い未来彼に起こる地獄を、防ぎたいとは思わないかな？」

数十台の車を牛蒡抜きして割り込んだ美和子は、ちらりとミラーに視線をやつた。そこには既に、ずっと付きまとっていた黒い車の姿はない。

「来ないわね。もしこれでも引っ付いて来たら、問答無用で逮捕しようと思つたけど」

「ええんか？ そんなん」

「いいのよ、相手はどう見ても誘拐事件の重要な参考人よ。誘拐に、拳銃の所持、発砲、そして殺人未遂罪……私が知つてる限りでも、挙げたらキリがないわ。これだけの事してるんだもの。その場で念入りに調べれば、現行犯逮捕も可能な証拠ぐらい出てくるんじゃない？」

美和子の言葉に、平次はただ苦笑いで返した。後部座席からもまた、二人分の乾いた笑みが返る。

「でも、あんなにあっさり諦めるなんて。警察車両って気づいてたのかしら。目立つた行為をしたくなかったって言うのも判るけど。……まあいいわ、一応ナンバーは覚えたし」

ミラー越しに見た限りでは、スピードを出しかけてやめたようにも見えるが。中の様子が伺えなかつた限りは、その真意に気づく事は不可能である。

「匕ひともそんなに無茶できなかつたしね、コナン君大丈夫？」

後部座席に尋ねると、コナンは身じろぎながら「平気だよ」と短い言葉を搾り出した。続くように、新出がコナンの手首を軽く握つた。

「少し、脈拍数が上がつてゐみたいですが……呼吸も乱れてるようだけど、本当に大丈夫かい？」

「う、うん」

「まあ、少し興奮してるのかも知れないけど。痛かつたり苦しかったり、少しでも具合が悪くなつたら言つんだよ？　君はすぐ無理する子だつてジョディ先生からも聞いてるし」

「ハハハ……」

少しだつとも感じる念の押し方に、コナンは乾ききつた笑みを浮かべた。

この心配性な医者に、余計な説明を吹き込んでくれるものだそつ頭の中で眩きながら、小さく溜め息をつき、目を閉じる。

「　っ！」

途端に、激痛がコナンの身体を襲つた。

大声を出すのを堪えた代わりに、眉間に深い皺が刻まれ、歯を強く食い縛つた。

痛いと表現すべきか、苦しいと表現すべきか。怪我をした足や腹部や肩口だけでなく、身体全体に。一瞬だけだが、胸部の圧迫と共に呼吸さえも出来なくなつた。

本当に、僅か四～五秒程度の一瞬ではあつたのだが。それを、新出が見過すはずはない。

「ちょ、大丈夫かい？」

「あ。うん、こめ……げほげほつ」

大丈夫、と言おつとしたものの、息が詰まり、咳き込みに遮られた。

「あ、おーーー！藤ー！」

前に居る筈の平次までもが、後ろを振り向いて心配そうな視線を送る。この「面子」の車内で、工藤と呼ばれた事には睨みを返したが、誰もそこには触れなかつた。運転席に座つた美和子も、心配そうな視線をちらちらとミラーに送る。

診察しようと医療器具に手を伸ばした新出を見て、コナンは深呼吸しながら咳を止めた。

「ほ、本当に大丈夫だから。動いて傷が痛んだけだよ……」

「けど、あの苦しみ方は尋常じゃないよ。一応診てあげるから」「平氣だつて。ほら……傷が開いたわけでも、ないし」

あえて包帯が巻かれた部分を強調したコナンは、無理やり笑顔を作つた。新出は僅かに顔をしかめながらも、小さく息をついた。

「確かに、車内で出来る事は限られているけど。病院に着いたらちゃんと診察と治療を受けるんだよ?」

「う、うん」

しつかり諭されている自分に溜め息をつきながらも、コナンは微かな焦燥を感じていた。

先ほどの激痛は一体なんだつたのか。味わつた事のないような苦痛だ。

考えれば考えるほど、心に陰りを落とす。

自分の身体がどうなつてゐるのか、それも勿論ある。ただ、一番大きく不安に思うのは、蘭の事だ。

今この時は、最も気をしつかり持たなければいけない」と、コナンは自分の心に言い聞かせた。

蘭を助けるまでは、倒れるわけにはいかないのだ。

「待つてろよ、蘭……絶対、這つてでも、助けてやつから……！」

口の中でだけ呴いた誓いの言葉は、一番近かつた新出にすら拾いきれなかつた。平次だけは、微かに聞こえたらしく、目を細め視線だけを後ろに向けた。

あー・・・・・

こんばんは。お久しぶりです(^ _ ^)

まだ出すつもりなかつたのですが、色々申し訳なくなつたので、とりあえず一つストックなくします。

色々と、励ましのメッセ、暖かな感想などなど沢山ありがとひびきります^v

拝見してとても幸せに漫りつつ……お返事滞つててすみませんvv
なるべく早めに、メール共々お返しいたします。日曜中に出来たら
やりたいデス。

心配おかげします。

どう言えればいいかな。あんな謎の言葉を掲示板に残したまま更新ば
つたりやむんじゅ、やつぱり不誠実だよね。

えつと、ちょっと一次創作書いてる根本が崩れたよつなショッキン
グな事がありまして。

・・・ちょっと、うん。ショックすぎて。

原作は私の神です、いつだつて。少しでも、たくさん同じような趣
味を持った方と、原作を語りたい思いがいつでも根底にあります
です。

だからね。原作だけは、一次創作を見る側書く側、どちらにとつて
も大切で神聖な場でないと、いけないんじゅないかな? 私達は二
次創作を、書かせてもらつてる、読ませてもらつてる立場にあるわ
けですから。

でね。そのショックな出来事とほぼ同時に、無駄にタイミングよく
PCの調子が悪くなつた為、真剣に執筆意欲がぶつとんでしま

いましてへへ；

書かなきやと思いつつも、なかなか再開できず～な状態で、溜めるストックも消化するのが怖かったので。

でもやっぱり、励まされた分も頑張りたいし、面白いって言つて読んでくれてる人がいる限り逃げたくもないし消したくもないし。完結させたいです。

好きだから書いてるのは確かですから。

勿論、この作品だけの話じゃなくて、どれも全部。
だから、復帰はするつもりで居ますけれどもへへ

次話分まではとりあえず終わって、新しいお話を書けるのはもう少し時間頂く事になるかもですへへ

気持ちだけは、頂いた数々の暖かな感想たちに、書きたい方に向かっているのですが、まだ実際書けるに至らずで。

PSも、じこ一週間一週間ほどは少し安定してきてるという感じでしょうか。色々「メンナサイ」へへ

それで、出すべきか否かと色々悩んでた事もあつたり、今回時間は少し遅めですね（へーへ；

APT-X 4869。根底にこれがあるからこそ、あらすじ部分へと進む感じかな。蘭ちゃんとボスとの対面、こんな雰囲気を書くのが大好きですへへ

色々な謎を宙に浮かせちゃいましたし。終わる頃には、納得してもらえるといいな。

フフ、これから少しずつ紐解く快感を味わえるのは作者の特権ですね

今回もお読み下さりありがとうございましたへへ
えと。頑張るので、もう少しだけ…もし出来ればラストまで。ついてきて下さいますか？へへ

16・死なせない

何の変哲もないコンビニに、一台の車が止まっていた。そこそこ格好のよい車で、コンビニに寄ろうとした人が、一瞬足を止め振り返る程度だ。

中に乗っているのもまた、半端なく綺麗な、ショートブロンドヘアに眼鏡の米国人だつた。そして、後部座席にはやたらクールな表情の子供が乗っている。女の子と間違う程の綺麗な顔をした少年と、通行人達は思つてゐる もまた人の目を惹いた。

その運転席に座つた米国人 ジョディは、妖艶な仕草で缶コーヒーのプルタブを上げた。それを一口飲みながら、左手の携帯電話を持ち直す。

「そ、やつぱりそっちにも、妙な車がつけてきたのね、作戦失敗か。……ええ、私達の車にも、さつきまでびつたりくつついてたわよ。どつか行つちゃつたけどね」

耳に当てた電話にそつと告げながら、ジョディはちらりと後部座席を覗いた。

退屈そうに腕組みをした少女は、手にもつてゐる携帯電話を適当にもてあそんでいるようだ。先ほどまで寝転んでいた彼女だが、見張りらしき車の存在がなくなるなり、起き上がって伸びをした。

微かに眉を寄せ、不愉快に目を細めながらも、彼女はじつと携帯電話の画面を眺めていた。

「じゃあ、佐藤刑事。コナン君達の事お願いね。警視庁捜査一課の協力、感謝するわ」

電話を切ったジョディは、ふっと笑って、助手席と運転席の間から、後ろに身を乗り出した。

「随分」機嫌斜めね、真美ちゃん

「ええ。彼があまりにやりたい放題だから。まあ、切羽詰っていたと言え、この分は後で請求しないと気がすまないわ。今度は何買わせようかしら」

クールに言いながら、彼女はずつと携帯のボタンを弄くっている。そんな真美の様子に、ジョディは小さく笑った。

「今更強がらなくとも、バレバレよ。一人で名古屋の公園前までドライブしてた区間のあなた、気が気じやなかつたじやない」

「冗談じやないわ。こんな事までやらされて」

溜め息をつきながら、彼女は携帯を閉じた。手にもつ部分に、血液が付着している。こびりついた血液は、乾ききっているせいで、擦つても落ちない。

目を細めながら、真美はそれを指でなぞつた。そんな筈はないのに、血のついた部分が、ほんの僅かに暖かいような錯覚に陥る。

「全く、こんなになつてまで……。これも買い換え時ね」「もしかしてそれを彼に買わせるの？」

ジョディが微かに呆れた口調で尋ねると、真美はシニカルな笑みを浮かべて見せた。

「あら、いいわね。事が全て解決したら、気になつてた最新機種でもねだつてみるわ。デザインが可愛いのが一台出てたのよ」

「彼も大変ね、あなたが一昨日私と会つた時、終始大事そうに抱え

てたあのブランドバッグも、その中についた財布も、彼からの贈りものなんでしょう？」

ジョディの言葉に、彼女は少しだけ頬を赤らめた。不自然に黒目を右往左往動かしながら、罰が悪そうに唇を小さく噛み締めた。

「別に……どれもこれも全部、ただの報酬よ。彼も私も、深い意味は考えてないわ」

「どうだか。素直にならないと損するわよ、真美ちゃん」

「う、うるさいわね、ほっといてー！」

からかい口調で言つたジョディに、真美はそう言い放ち、そっぽを向いた。そして思い出したように、渡されていた缶コーヒーのブルタブを持ち上げると、ぐつと口に流し込む。歳不相応に、缶にはブラックと書かれているわけだが、彼女はその苦さも涼しい顔で飲み干した。

そして、不機嫌な視線をジョディに向ける。

「どうでもいいけど、ここまでここに休憩してゐつもり？ セツサと目的に行つてくれないかしら」

「はいはい。じゃあ早速行くわよ」

前に向き直り、ジョディは車を発進させた。後ろに座る彼女はまた、もう少しの間怪我人役に徹するべく、その場に寝転んだ。険しい顔つきで、先ほどの携帯電話を握り締めながら。

ニュースが車のラジオから流れてくる。この三日間に起きた事件がほぼ繰り返すような形で流れていた。そして、真美自身の事件もまた彼女の耳に届く。

彼女はすっとそれらを聞きながら、目を細めた。

「私は、結局また生き残ってしまったよつね……」

悲しげに小さく呟いた彼女は、目を閉じ思考を巡らせた。脳裏に鮮明な形で蘇るのは、突きつけられた銃口と、熱い炎、そして耳元に囁かれた言葉だ。

”あなたが、全ての事を引き起こしたのよ。だから、これから起ころう周りの悲しみは全てあなたが原因ね。それでも助かりたいなら、ただ一人の人を助けたいなら、私の言つ通りにしなさい。これから、”

続くその言葉は、あまりに過酷で残酷な道を思わせた。それでも、こつしてあの言葉通りに生きている自分が居る。

どうなつたとしても助けたかった、ただ一人の為に。

「死なせないわ、絶対。あなただけは」

後部席の呟きを聞きながら、車を走らせるジョディは無言のまま、目を細めた。

午後五時半頃になつて、探偵事務所の三階に居た高木の携帯が鳴

つた。気になる様子で群がつてくる子供達を避けながら、電話を受けた。

「高木です……あ、佐藤さん!」

『ええ、もう病院に着く所よ。ちょっとぴり予定が狂つたせいで遅くなつちやつたけど』

少し苦笑する声が返ってきて、高木はちらつと時計を見た。これから東京に向かうと連絡があつた時から逆算して時間を考える。

「い、いえ、十分早い気が……それで、病院には皆連れてつていですか?」

『皆はさすがにますいですよ。そうね……博士と、毛利さんだけにして。警部にも今連絡したから』

「判りました、じゃあ子供達には適当に理由つけて、沖矢さんとも遊んでもらいます」

『うん、お願ひね。高木君』

電話が切れたのを確認して、高木は携帯をポケットにしまいこんだ。そして、小さく息を吐く。

「けど、とりあえずコナン君だけでも助かつてよかつた……」

呟いた後で、部屋に入った高木は、博士ただ一人を呼び出した。そして、外で事情を耳打ちし、田を丸くした博士と共に二階へと降りた。

戸を開けると、警部が今までに出て支度を整えていた。

「ああ、佐藤君からの連絡があつたかね。じゃあ行くぞ、高木君」

「はい! つて、毛利さんは?」

「ああ、毛利君ならやつせ、コナン君の事を言つたらすつ飛んで……」

…

高木は首を傾げると同時に、階段下から車のドアが開く音を感じた。

多少苛立つた様子の小五郎が、階段に顔を出す。

「高木刑事も警部殿も何やつてんスかー！」

「ああ、スマン今行くよ」

田暮は謝りながら、一人と共に階段を降りた。田暮が運転席、阿笠と小五郎が後部座席、高木が助手席に乗り込んだ。程なくして、車は探偵事務所を後にした。

車の中は、一人のちょび髭親父のせいで相当にやかましかった。田暮が座る運転席を掴み揺らしながら、田暮や高木の耳元で騒ぐ。高木は苦笑しつつも片耳をふさぎ、田暮は渋い顔で前方に集中した。

「ちょっとー もつとスピード出せないんですか、警部殿ー！」

「落ち着きたまえ毛利君、これ以上は出せんよ」

「で、コナンの容態はどうなつてんスか！ それに蘭……蘭は！？」
「蘭君が無事保護されたという報告は入つていない！ その辺はコナン君が話せる状態だつたら彼に聞いてくれ」

そう答えながらも、田暮は気持ちだけスピードを速めた。

一方で、そんな騒ぎ通しの小五郎とは正反対に、博士はそれを宥めながらも、静かに座っていた。

「心配しておつたんじやぞ、新一」

前に聞こえないように呴いた博士は、小さく微笑した。そして再度、身を乗り出す小五郎を席に引き戻す。

「大丈夫じゃよ、コナン君が無事なら、蘭君もきっと必ず帰つてくれる」

「しつかしですねえ、阿笠さん！ 蘭は現に今も行方不明なんですか？ コナンだって、病院つて事は無事とは言えない状態じゃないですか？」

「それは、そうかも知れんがの……わしとしてはコナン君が帰つて来てくれただけで」

そんな会話を交わしながら、車は病院へと入つて行つた。

＊＊＊

病院へ着くなり、小五郎は車から飛び出した。走つていく彼に続くように、博士や高木、そして田暮も走つた。駐車場に置かれた美和子の車に一瞬視線を送りながら。

ついた病室は、思いの外に騒がしかつた。新出と警察病院の医師や看護師数名が、忙しく処置を施している。蒼ざめた顔でベッドに寝かされているコナンは、目を閉じたまま苦しげな呼吸を続けていた。

「新一く……」

「お、おこー 何があった!」

小声で呟きかけた博士の言葉を、いい感じに打ち消す声がその場に響いた。慌てて口を噤んだ博士の横で、小五郎は、部屋の隅に呆然と立ちつくしていた平次の胸倉を掴む。

振り向いた平次の眉間に、皺が寄っている。動搖の為か、彼には珍しく瞳が揺れている。

「お、オレにもよー判らへんねん。さっきまで普通にしてたんやけど、病院にたどり着いて診察しどうたら、突然苦しみ出したんや」

「何だそれ! あのボウズビッグなつまうんだ!」

必死の形相で掴みかかる小五郎と平次の間を、後ろから追いついた警部は宥めるように引き離した。

「毛利さん達も服部君も、とつあえず落ち着いて静かにして下さい! 必ず助けますから!」

新出の言葉に、小五郎は力なくうなだれた。

「どうなつちまつたんだ、全く……」とぼやきながら、彼は拳をきつく握り締めた。

16・死なせない（後書き）

えーと・・・・・・えーと（滝汗）

あけましておめでとう御座います。そして、お久しぶりです～～～
皆様お元気にされてましたでしょうか？

相当間が空いてしまいました申し訳御座いませんでした～～

復活・・・と言つ訳ではないのですが、PCの不調や先に話した内容にプラスして、十一月が急に忙しくなりすぎた為、お返事も完全に滞ってしまっていたこと、お詫びいたします。お詫びと新年の挨拶も兼ねて、投稿させていただく決意を固めました。

勿論、必ずお返事しますのでっ！ てか、これ投稿してから少しだけ頑張るつもりです～～～もう、離れて中々復帰できない私に、この作品にも、他の作品にも、そしてメッセでも、温かすぎる言葉の数々、凄く嬉しさを噛み締めています～

こうやって、更新が難しくなっています宣言をしても、お返事が遅れてしまっても、素敵な感想など沢山頂きました、そんな言葉に支えられて今までここに居ます～

そんな方々にも色々申し訳ないので、元よりストックしてた分の最後です。新しい続きはまた頑張らないとなー～～～頑張ります、ええ。また少しあ待たせしてしまつかも知れませんが。

真美ちゃん、本当の意味でこの子を活躍させられる時が早く来ればいい それを書くのが楽しみデス～～
なので今回は、この子に言わせた台詞をタイトルにすると同時に、ラストと絡めて『死なせない』で。

こいついうストレートなシリアルス題をつけるのは、さりげなく恥ずかしさも伴いますね～～～今更何をつて感じでしょうか（笑）

それでは、また今年もどうぞロジックお願い致します^v

そして、次話もまた懲りずに付き合っていただければ嬉しいです^v
今後ともこんな奴ですが、変わらず絡んで話しかけてやっていただき
けると幸せです(^ ^ *)

皆様にとっても〇九年が素敵な年ありますよ^v^v

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3551d/>

Meets again ~もう一度君と~

2010年10月9日02時07分発行